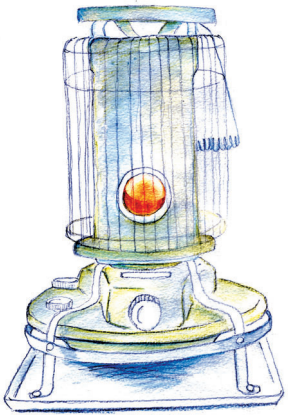
山田健二郎

季

―四季を愉しむ―



季 ― 四季を愉しむ ―

はじめに

芭蕉から現代まで　だれでも共感できる、やさしい表現の俳句川柳の中から、私なりに集めていたものを、このほど一冊の本にしてみました。

私たちにとって、一年を通じて暑さ寒さの期間がひときわ長く感じられます。

それだけに、短い春と秋を　より大切にしたいものです。

人間の営みと　植物や動物の営みと、どこが違うのでしょうか。

万物と我とは　ひとつのものである、宇宙は一箇の無縫塔であるという視点で、生活しております。

芭蕉は人生即行脚（あんぎゃ）と自覚し、乞食（こつじき）行脚漂泊の旅寝の枕に思索探究を重ね、蕉風俳諧の芸境を身をもって開拓創造しました。

芭蕉の唱道する「軽（かる）み」の風体は、和歌的伝統の風雅性を「不易（ふえき）」のものとして、必ず内在せしめつつ、しかし表現としては「流行（りゅうこう）」する卑近な現実の世俗界に新鮮な俳材を求めるところにある。それによっ

て、俳境をいつも一歩先へと開拓して「新(あたら)しみ」を尊重しつつ、「滑稽性(こっけいせい)（興(きょう)）」を表出させる作品を意図している。

明治以降、近代俳句では写生説が本流であるが、芭蕉は、詩情の高揚した時、素朴な写実を捨て、現実界を昇華させ、心象風景として描出し、そこに鮮烈な心懐を、象徴的に表白している。

一日遊山して　はじめは芳草に随って去り　また落花を逐ふてまわる。

俳句を通して自由無碍の遊戯三昧、とらわれのない心を養いながら、静かに生を謳歌したい、というのが、この小書の目的です。

折々の自然との暮らしのなかで、小書が　あなたのお役に立てれば、この上もない喜びです。

芭蕉去りて　そののち　いまだ年暮れず　　蕪　村

合掌

新年

一月

元旦　元日、元朝（がんちょう）、大旦（おおあした）、去年今年、初春（はつはる）、今朝の春、春着（はるぎ）、初空、初明かり、初日、初晴れ、御降（おさがり）、初東雲、初茜、淑気、瑞雲、若水

年々（としどし）や猿に着せたる猿の面（めん）　芭蕉

世の中の人も同じで、毎年毎年、同じようなことを
繰り返しているにすぎないのではないか。
人同じ所に止（とど）まりて、同じ所に年々（としどし）落ち入る事を悔いて言い捨てたる。
それはそうであるが、季節があり、行事があることによって
生活にメリハリができるのではないか。

年は人にとらせて　いつも　若夷（わかえびす）　芭蕉

京阪地方で当時、元旦の早朝に若夷売りが、「若夷、若夷」と呼んで、恵比寿像を印刷したお札（ふだ）を売り歩いていた。
家々では、門口（かどぐち）にそのお札を貼って一年の福を祝った。
昔の数え年では、元旦にみんなが揃って一つずつ年をとった。
若夷は、いつも若くて、ちっとも年をとらない。
代わりに人間が若夷の分まで年をとってしまうから。

去年今年（こぞことし）貫く棒の如きもの　高浜　虚子

いのちまた燃ゆる色なり初明かり　神蔵　器

若水や星うつるまで溢れしむ　原田　種芋

屠蘇酌みて　三十余年　夫婦なり　長沢　常良

金泥の鶴や　朱塗りの屠蘇の盃　　夏目　漱石

何の葉の　つぼみなるらん　雑煮汁　　室生　犀星

餅焼いて　新しき年裏返す　　原　裕

十分にほうけて　老いの年酒かな　　池田　清

雑煮食ふて　ねむうなりけり　もったいな　　村上　鬼城

子等去りて　食い積みのみが　残りけり　　岡田　龍

おのおのの　年をとりたる　年賀かな　　高浜　虚子

賀状　うづたかし　かのひとよりは来ず　　桂　信子

元朝や　もの書くわれの　うとましき　中村真一郎

元旦や　手を洗いをる　夕ごころ　芥川龍之介

初夢や　金も拾はず　死にもせず　夏目　漱石

初夢――元旦から二日にかけての夜見る夢。一富士　二鷹　三茄子。

大吉も　微妙にちがふ　初みくじ　安部　桂

二日　書初め　初荷　初みくじ

年玉や　古く悲しき　親の恩　高橋　睦郎

三日はや　煮しめのごぼう　弱りだす　黒木　千草

〈一日～三日　歳旦〉

初雪や　づっぷりと湯に入りてから　　一　茶

目出度さも　いい加減なり　おらが春　　一　茶

ちゅうぐらいなり（方言）――いい加減なり

空澄んで　煤煙も来ず　三が日　　北峰　青圃

妙齢を　包む　正月　小袖かな　　青木　月斗

初髪の　雨を抜け出し　匂ひかな　　黛　まどか

〈一日～七日　松の内、正月、新年〉

鵜の川の水やわらかに初茜　　辻　恵美子

湯疲れの　雪見障子を上げにけり　黛　まどか

日本がここに集まる初詣　山口　誓子

初晴れに　はや聞く凧の唸りかな　吉田　冬葉

福笑ひ　山茶花　散らすごとくなり　中島　月笠

静かさや　冴え渡り来る　羽子の音　村上　鬼城

双六（すごろく）の賽振り　奥の細道へ　水原秋桜子

たとふれば　独楽（こま）のはぢける如くなり　高浜　虚子

歌留多会ありともみえぬ　門の深さ　鈴木　鷆衣

年男雪の畦道つたひくる　　柏　禎

悪女たらむ　氷ことごとく割り歩む　　山田みづえ

地に低く　幸せありと　福寿草　　保坂　伸秋

敷き松葉　新しき泥　落ちている　　梶川みのり

冬・敷き松葉（夏・散り松葉）

とけそめし　七草粥の　なずなかな　　星野　立子

七日、松七日、七日正月、　七草粥、

七草―せり、なずな、母子草、はこべ、たびらこ、かぶら、大根

人日（じんじつ）の椀に　卵の黄身ひとつ　　野澤　節子

一日鶏、二日狗（豚）、三日猪、四日羊、五日牛、六日馬、七日人の占いをした。
これ、古代中国の占い、卵の黄身がめでたい感じ。

次の間に妻の客あり　寝正月　　日野　草城

八日　初薬師。八日頃　若草山焼き。九日頃　成人式。

雪沓も　掃きなれぬ　地酒酌みかはす　　河東碧悟桐

寒梅の　固きつぼみのにぎわしき　　高浜　年尾

十日　初戎、初金比羅

傍観す　女手に　鏡餅割るを　　西東　三鬼

十一日　鏡開き

天の下　人の小さき　とんどかな　金尾梅の門

十四日　餅花、　関西の門松納め、　左義長

まことに勝手ながらと　女正月　膝館すみえ

十五日　小正月、女正月、小豆粥、初聖天

衰ふや　一椀おもき　小正月　石田　波郷

吉野葛　椀に透きゆく女正月（めしょうがつ）　野見山ひふみ

越前の闇の底より寒念仏　鈴木　鷹夫

十六日　初閻魔、十八日　初観音、

二十日　二十日正月、松過ぎ、正月行事終了、

大寒二十一日　初大師、

初天神　友みな　遠くなりしかな

二十五日　天満宮初縁日。二十八日　初不動。

星野麦丘人

みかんに爪たてて　やさしきことを言う

小川　千草

カステラの　ザラメを舐めて　寒の入り

小寒一月五日　寒の入り

伊藤　伸介

無一物とは　寒晴（かんば）れのやうなもの

内山恵美子

喉飴を　ひとつよばれて　寒四郎

寒四郎　一月八日頃

相原　宗作

寒の水　念ずるように　飲みにけり

細見　綾子

切り餅が　寒九の水に　七つほど　　大島　セツ

寒九　一月十三日頃

手拭の　ねぢったままの　氷かな　　一　茶

寒し、冷たし、底冷え、凍る、かじかむ、

霜　踏むごとく　浮き桟橋に　降りにけり　　福島　勲

風花や　貌あげて鳴く　とりけもの　　長篠　旅平

風花に　驚破一角の日の光　　山口　誓子

凍鶴の脚　いつのまに　踏み替へし　　北村　周子

温もるは　汚るるに似て　風邪ごもり　　岡本　眸

大原女の　眉は山の香　初しぐれ　渡辺　恭子

襟巻きを　別れてよりは　二重にす　福井　隆子

北窓ふさぐ　噂は　ふさがれず　太田みどり

隙間風　身に切り傷のあるごとし　八牧美喜子

冴ゆるなり　星の炎の　見ゆるまで　宮津　昭彦

三寒の　四温を待てる　机かな　石川　桂郎

日当たりを　まずほめ合ひて　冬座敷　佐治　英子

脱ぎしもの　膝にあまして　初芝居　　黛　まどか

夫ありし日のままの部屋　日脚伸ぶ　　安部　桂

天の鷹　雄のさびしさを高めつつ　　野見山朱鳥

一月の肉塊として　鷲仰ぐ　　今井　聖

鴛鴦の　ときに一羽と　なりたがる　　片山由美子

寒鯉や　堂々として　水の底　　湯浅　房枝

水鳥の　しずかに　己が身を流す　　柴田白葉女

牡蠣割女　貝の要を一撃す　　品川　鈴子

鮟鱇の腹の一物　掴み出す　木内　彰志

下京や　板に貼りたる河豚のひれ　武藤　紀子

河豚さしを　絵を描くように　皿に盛る　吉岡みよの

大皿に　越前蟹の　かしこまる　檜　紀代

ひれ酒や　あと五分にて　終電車　川村　巴

雪眼鏡雪原に日も牛も碧き　橋本多佳子

かんじきをはけば　無口や　山道へ　山田なつめ

雪下ろし　夕空碧く迫り来る　金尾梅の門

命綱つけ　本堂の雪卸し　若井　新一

もう誰もいぬ　校庭の雪だるま　立花　文江

雪焼けや　をんな　越後の山の中　佐藤惣之助

しぐるると言いて厠の灯を消せり　高瀬　哲夫

初雪や　水仙の葉のたわむまで　芭　蕉

水仙や　白き障子のとも移り　芭　蕉

熱田で詠んだ句

貼り替えられた障子の白さと、生けてある水仙の清らかさとが

お互いによく映えて引き立てあっている。
　とも移り――お互いに引き立つということ
水仙からの連想で一言。
吹田から富山に向かって北陸道を車で走っていたとき、
日本海の荒波と水仙がお互いによく引き立てあっていた。

水仙を見ては　綺麗な嘘をつく　　田原　正彦

逢いに来ないか　どんな理由ももたぬまま　　高橋かづき

殺すかもしれぬ愛へと　さしかかり　　時実　新子

櫓の声　波ヲ打って　腸氷ル　夜や　涙　　芭　蕉
俳諧の宗匠としての生き方に疑問を覚え、
江戸の繁華街九年の生活を棄てて深川に隠棲してまもないころ、

深川の川波を打つ櫓（ろ）の音がさびしく聞こえてくる。
腸（はらわた）まで凍ってしまいそうな寒い夜。
あまりのわびしさに思わず涙をこぼす。
蕉風の俳諧を創り出す試練として、
これまでの宗匠としての収入が断たれ経済的基盤を失ったのである。

三十年　共働きや　実千両　　安部　桂

食べて寝るだけでも　今日を大切に　　孝久美智子

ゴミ出しに　着替える人とパジャマ党　　児玉　暢夫

眼の高さ揃えて生きる生き上手　　寺尾百合子

若駒の　親にすがれる　大きな眼よ　　原　石鼎

山焼くとばかりに　空の　ほの赤き　正岡　子規

二月

うかつにも　鬼に返事をしてしまう　来住タカ子

ちょっとだけ不幸な人と　仲がよい　内田　充子

ポケットの怒り　ときどき指に触れ　時実　新子

叱られて　目をつぶる猫　春隣　久保田万太郎

日の温み　障子　いよいよ　ましろなり　星野　立子

三寒四温、春隣、

節分の　赤鬼は　まだ　屋台酒　　松村　竹心

節分　立春の前日、追儺鬼（ついなおに）、柊挿（ひいらぎさ）す。

鬼もまた　心のかたち　豆を打つ　　中原　道夫

追灘鬼　そこらまわって　帰り来し　　田代　蒼猫

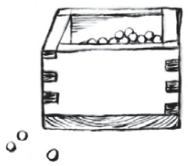
一人居の戸にも　柊挿（ひいらぎさ）しにけり　　佐々木六才

日の光　今朝（けさ）や鰯（いわし）の頭より　　蕪　村

福寿草　家族のごとく　かたまれり　　福田　蓼汀

まえがきも　あとがきもなく　命かな　　浅野　良雄

かくれ家や　歯のない口で　福は内



一　茶

春

立春二月四日頃

春―発、張る。　寒明け。

初春（しょしゅん）　札幌雪祭り　二月五～十一日頃

早春、春浅し、雪も残り、風も冷たく、冬の感じの中の春の気配。

春寒、料峭。

余寒――もうすぐ春、しばらくの辛抱、そういう気持ちにさせる言葉の智慧。

寒戻る、春寒、春北風、余寒

冴返る　　いったん暖かくなって、また、寒さがぶり返す。

凍返る　　地上の凍ての戻ってきた状態。

いきなりの春　街は雪景色

楢崎　充代

みちのくの雪深ければ　雪女郎　　山口　青邨

雪女　音もなく　香もなく　過ぎしなり　　三谷　昭

樏（かんじき）を履きて　高野の人力車　　福田　蓼汀

三歳と六十歳の　雪だるま　　井出はじめ

柊に冴えかえりたる月夜かな　　丈　草

ゴム手袋ごわごわ寒の戻りけり　　杉山　辛夷

思い出で薬湯たてる余寒かな　　召　波

頭の中の一箇処かゆし　薄氷　　河原枇杷男

箸といふ文化が不思議　建国日　　林　翔

梅一輪　一輪ほどの暖かさ　　嵐　雪

梅、梅見、雪割り草、探梅→蝋梅→白梅→紅梅

一輪といふは　寒紅梅の今　　皆吉　爽雨

この梅に　牛も初音（はつね）と鳴きつべし　　芭　蕉

天満宮、菅原道真といえば梅。

その梅に談林風の創始者西山宗因の別号「梅翁（ばいおう）」をきかせている。

牛は天神の使者として祀られる臥像の牛。

京都天満宮の梅のすばらしさには鶯（うぐいす）はもちろん、

社前の臥像の牛までも初音を鳴いて、神徳を讃えている。

梅が香に追ひもどさるる寒さかな　芭蕉

盆梅が満開となり　酒買いに　皆川　晩水

梅日和　湯気立つものに　人の寄り　黛　まどか

二(ふた)もとの梅に遅速(ちそく)を愛す哉(かな)　蕪　村

東岸西岸の柳、遅速同じからず。
南枝北枝の梅、開落すでに異なる。（和漢朗詠集）を踏まえた。

探梅や　汽車に乗り込む　舞妓どち　高橋　直子

思はざる急流とあふ　探梅行　能村登四郎

蝋梅を　雪ごとすくい賜りし　佐子まりな

梅が香に　のっと日の出る　山路かな　　芭　蕉

清爽感あふれる早春。

梅の香のふくいくと匂う未明の山門をたどっていると、

行く手の山の頂から、赤い大きな朝日が急にのうっと（ぬっと）昇りはじめた。

平明な句調で軽みの代表作。

芭蕉は「軽み」を主張し、「重み」を批判した。

当時の俳諧は、古典文学などの故事来歴や観念的虚構の世界が詩材として

多く求められ、瑣末な技巧主義に堕ちてむつかしく表現することに腐心し、

真実味のない虚飾を残すだけに終わっていた。

そうした作意や表現を「重み」「古び」といった言葉で批判した。

限りなき春の風なり　梅の上　　夏目　漱石

鶯や　尼と老いゆく　寺男　　勝又　一透

鶯（うぐひす）を魂（たま）に眠るか　矯柳（たをやなぎ）　芭蕉

荘子、胡蝶の夢。蝶を鶯に、荘子をたおやかな柳に置き換えている。
胎蕩（たいとう）たる春の昼下がり、たをやめの柳がたおやかな枝を垂れて
静かに眠るがごとき青柳に鶯が来て鳴いている。
そのさまは眠る柳の精が夢の中で鶯と化し、鶯の心になって
声を発しているのかと錯覚させるほどだ。
荘周が夢の中で胡蝶と化して、ヒラヒラと楽しく飛びまわり、
自分は胡蝶なのか、周自身なのか、区別できなくなったという
荘子「荘周　胡蝶の夢」による。

君や蝶（てふ）　我（われ）や荘子（さうじ）が　夢心　芭蕉

怒誰（どすい）と「荘周　胡蝶の夢」について語りあって

一羽二羽　雀あそべる春時雨　笠原芽ぐむ

かび臭き　父の資料も獺祭（おそまつり）　白井　薔薇

かわうそ魚を祭る―かわうそは捕らえた魚を並べる。

水温（ぬる）む　主婦の喜び　口に出て　山口波津女

魚氷（ひ）に上（のぼ）る　二月十五日～十九日、

ようやく少し暖かくなり、魚も氷の上にでてくるようになる。

鯉ゆけば　岸は明るく　水ぬるむ　山口　青邨

黄砂ふり　日輪とても　病みたまふ　古林富三郎

春泥を歩く　汽笛の鳴る方へ　細見　綾子

掌（て）に盛れば　蜆（しじみ）まぶしく　こぼれ落つ　山田みづえ

青海苔や　水に差し込む　日の光　正岡　子規

下萌えや　土の裂け目の　物の色　太　祇

ほとばしる　水のほとりの　ふきのとう　野村　泊月

しおらしや　細茎赤き　ほうれん草　村上　鬼城

山茶花や　日日　藁（しべ）の黄のみだれ　瀧井　孝作

茶の花の雨を含める白さかな　鈴鹿野風呂

みずからの光りを頼み　八手咲く　飯田　龍太

裏木戸の　日の明るさや　竹の秋　倉田　素商

黄水仙に　なお霜よけのありにけり　長谷川零余子

麦踏みや　寒さに耐えて　小刻みに　西山　白雲

麦踏み―（踏み押さえて根を充実させる。）

母に効く富山の薬　雪間草　佐保田乃布

犬そりのゆきつく果てや　雪割り草　山内　素乱

木瓜（ぼけ）もえて　雨滴の垂るる　女傘　石原　舟月

暁（あかつき）の雨や　末黒（すぐろ）の　薄原（すすきはら）　蕪　村

どうしようもない　わたしが　歩いている　山　頭　火

じいじから　じじいにかわる　反抗期　中山　源司

人の世や　棺に打ち込む　釘もあり　橘高　薫風

七転び八起き　それから　死ぬばかり　濱　夢助

復讐と書き　降参と書き直す　河野　春三

流氷（りうひょう）や　宗谷（となみ）の門波　荒れやまず　山口　誓子

鞦韆（しうせん）は漕ぐべし　愛は奪うべし　三橋　鷹女

春雷や　俄かに変わる洋の色　杉田　久女

一枚の餅のごとくに　雪残る　川端　茅舎

三月

春の海　終日（ひねもす）　のたりのたり哉（かな）

蕪村

テオドル・オオバネルの詩を思い出す。

海のあなたの遥けき国へ
いつも夢路の波枕
波の枕のなくなくぞ
こがれ憧れわたるかな
海のあなたの遥けき国へ

佐保姫や　翡翠の玉を胸にかけ

高野　虹子

龍天に登る―（春の精気に乗じて龍が昇天する）
佐保姫―（春の野山の造化をつかさどる）

天平の乙女ぞ立てる　雛(ひいな)かな　水原秋桜子

桃の節句　三月三日、白酒、流し雛。
五節句　一月七日人日。五月五日端午。七月七日七夕。九月九日重陽。

対(つい)の雛　見つめあえぬが　睦(むつ)まじき　山田健二郎

連れて来し小さき友や　雛の客　中田　幸枝

曲水(きょくすい)の詩や　盃に遅れたる　正岡　子規

曲水の宴　三月三日の行事

処女(おとめ)　みな　情濃かれと　濃白酒　松本たかし

ふだん着でふだんの心　桃の花　細見　綾子

喰うて寝て　牛にならばや　桃の花　　蕪村

牛の異名は桃林処士。牛と桃林とは縁語。

船足も休む時あり　浜の桃　　芭蕉

名古屋市鳴海展望

春泥に　悩める様も　女らし　　今井つる女

春愁や　この身このまま旅心　　久保より江

水取りや　氷の僧の　沓（くつ）の音　　芭蕉

お水取り　三月一日から三月十四日まで

東大寺二月堂若狭井から未明に水を汲む儀式　十二日。

亡き母の　ついと横切る　春障子　井上　雅文

目刺し食む　苦さに　昔よみがへり　掛水　宗悦

啓蟄（けいちつ）をくわえて　雀飛びにけり　川端　茅舎

地虫穴を出づ　三月六日頃

蛇　穴を出て　水音を聞きにけり　三橋　鷹女

蛇　穴を出て　シャンパンの音を聞く　正木ゆう子

リゾートホテルの芝生の上での結婚披露宴でしょうか。

山寺や　涅槃図かけて　僧一人　星野　立子

涅槃会（ねはんえ）　陰暦二月十五日

涅槃図　釈迦入滅の姿、涅槃像を描いた図

涅槃会や　誰が乗り捨ての茜雲　　上田五千石

神垣（かみがき）や　思ひもかけず涅槃像（ねはんぞう）　　芭蕉

ここは神の領域（伊勢神宮の外宮（げくう）の館）なのに
思いがけず涅槃像を拝見した。
今日は涅槃会だったのだなあ。
神垣のあたりと思ふゆふだすき思ひもかけぬ鐘の声かな　金葉集
を踏まえている。

何（なに）の木の花とは知らず匂い哉　　芭蕉

笑へば　泣くように見える顔より　ほかなかった　　尾崎　放哉

遊ぶだけ遊んで　卒後フリーター　　金山美智子

預けたら　二度と戻らぬ　ママバンク　　チャップリン

自由な男　ひとりになって　ひとりごと　　浜島　中呂

なすことのまだある　老いの輝きよ　　時実　新子

揚雲雀（あげひばり）　空の真ん中　ここよここよ　　正木ゆう子

春めく、東風（こち）、霞。

鷹化して鳩となる――おだやかな春の感じ　三月十六日～二十日

春分の日三月二十一日頃、彼岸、彼岸会、彼岸寒。

原中（はらなか）や　ものにもつかず啼（な）く雲雀（ひばり）　　芭　蕉

果てしなく広い春の野から雲雀が高く高く舞い上がり、

何にすがることもなく無窮の天空で、すべてを離れ切って、

ただひたすらに無心にさえずっている。

雲雀立つ荒野に生ふる姫百合の何につくともなき心かな　西行

（姫百合は何にもとらわれることなく無心である。）

を踏まえて、揚雲雀に天性の自由の境地（荘子）を見ている。

芭蕉は荘子の影響を強くうけている。

私も四十歳前後の頃、荘子の感化をうけてかなり読んだつもりだが、荘子哲学と仏教とは顕れてくる表面はよくにているがその根元は異なる。

芭蕉も臨済宗仏頂禅師に参禅していたようだが。

ロバート・ブラウニングの詩を思い出す。

時は春、日は朝、朝は七時、
片岡に露みちて、揚雲雀なのりいで
蝸牛枝に這ひ、神空に知らしめす。
すべて世は事も無し。

鷹ひとつ　見つけてうれし　いらご崎　　芭　蕉

馬酔木咲く　春日祭のまだ寒し　　辻　桃子

尼寺や　彼岸桜は散りやすき　　夏目　漱石

春なれや　名もなき山の薄霞　　芭　蕉

故郷伊賀から、奈良に出づる道のほど、山々の景情を活写。

みちのくの　春田貫き　線路伸ぶ　　船越　光政

歩きそめし子を陽炎（かげろう）の中におろす　　田川飛旅子

陽炎や　ほろほろ落つる　岸の砂　　土　芳

入りかかるひも糸遊（いとゆう）の名残りかな　芭蕉

ひも　掛詞

①日（夕日）も
②糸遊（いとゆう）（陽炎（かげろう））の紐（ひも）

今まさに山際（やまぎわ）に沈まんとする夕日。
陽炎もまた消えかかろうとして淡く燃えている。

山笑ふ　村のどこかで　子が生まれ　尾形不二子

山笑う（春の山の明るい感じ）
春山は淡治にして笑うが如し。夏山は蒼翠にして滴るが如し。
秋山は明浄にして粧ふが如し。冬山は惨憺として眠るが如し。

生き下手が　古希　迎えるや　山笑ふ　北村　栄子

春雨や　蓬（よもぎ）をのばす　艸（くさ）の道　芭蕉

蓬は今では蓬餅にしたり、灸のもぐさとして利用しているが、
戦後の昭和二十年代には、蓬をたくさんいれたおかゆが
今でいうごはんであり、蝗（いなご）の丸焼きが今でいうおかずであった。
蓬摘みと蝗とりが子供の日課であった。
食べるということが親まかせではなかったのである。

春雨や　猫に踊り教へる子　一茶

春雨や　小磯の小貝　ぬるるほど　蕪村

春雨や　謡（うたい）の洩るる　京の町　横田　太郎

どこに座しても　春の野の　くすぐったき　黛　まどか

つばめつばめ　泥が好きなる　ツバメかな　細見　綾子

鳥交わる、獣交わる、猫の恋、種付け。
鳥帰る、白鳥帰る、引鶴、引鴨、帰雁。
鳥渡る、燕渡来、ツバメの巣、うみねこ渡る。

子燕のさざめき　誰も聞き流し　中村　汀女

変はらざる生家の庇（ひさし）　燕（ツバメ）の子　安部　桂

恋猫の身も世もあらず　啼きにけり　安住　敦

雀の子　そこのけそこのけ　お馬が通る　一　茶

残れるは　荒波にをり　鴨帰る　水原秋桜子

行く雁の　啼くとき　宙の感ぜられ　山口　誓子

若鮎や　谷の小笹も　一葉　行く　蕪　村

若鮎（春）、鮎（夏）、下り鮎（秋）。

若草や　水の滴る　蜆籠　夏目　漱石

花種蒔く　土の眠りを覚ましつつ　古賀まり子

横向きの太き芽のある　根分けかな　仲田みづほ

木（こ）の芽時、ものの芽、雪間草、椿、蕨。

物種蒔く、苗木植える、球根植える、接木、挿木、剪定。

種まき、芽吹き、万物に力みなぎった穏やかさがある。

雪間より　薄紫の　芽独活（めうど）かな　芭　蕉

ものの芽を　うるほしいしが　本降りに　林　翔

ほぐれんとして傾ける物芽（ものめ）かな　中村　汀女

木（き）の芽和え　この頃　朝の食すすむ　上村　占魚

木の芽（き）（山椒の若芽）

夫（つま）が堀り　妻（つま）が土かけ　苗木植う　小栗しづえ

摘草（つみくさ）や　背（せな）に負う子も　手まさぐり　炭　太祇

ヨモギや、ツクシなど、食用になる野の草を摘む。

菜の花の盛りに　一夜啼く田螺（たにし）　河合　曾良

パンジーの畑　蝶を呼び　人を呼ぶ　松本たかし

膝つけば　湿りいる草　つくし摘む　安部みどり女

ぜんまいの綿毛　つぶさに濡れいたる　串田　征史

まな板に旭さすなり　芹薺（せりなづな）　泉　鏡花

雪解けの中にしだるる柳かな　芥川龍之介

たえず風やり過ごしおり雪柳　高木　晴子

椿落つ　妬心の闇の深き底　久保田万太郎

れんぎょうに　空の　はきはきしてきたる　後藤比奈男

庭石に花こぼしおり　沈丁花　　富安　風生

すみれ摘めば　小さき春の心かな　　加藤　暁台

すわりたる舟をあがれば　すみれかな　　蕪　村

山路(やまぢ)来て　何やらゆかし　すみれ草　　芭　蕉

芭蕉は「人間とはなにか」、「人生とはなにか」という根本問題に戻って俳諧を見直していた。私の体の中に風羅坊(ふうらぼう)が住んでいる。それは薄い絹織物が風に破れやすいように、すぐいたみきずついてしまうことを言うのでもあろうか。

この句は日本武尊(やまとたけるのみこと)にゆかりのある尾張の国熱田白鳥山法持寺(ほうじじ)での作。

この句は、言葉や観念の知巧、理屈をすっきりと洗い流し、ことさらな作意を弄(ろう)さず、ただ「何やら」という暗示的な表現で、逆にすみれ草の

可憐な表情の細部を匂わせている。

春の山路を歩いてきて、ふとすみれの花に目がとまった。
日頃は気にもとめなかった小さな花だが、なんとなく心を惹かれる。

道の辺（べ）の木槿（むくげ）は　馬に喰われけり　　青柳 志解樹

石垣に遠き日のあり　すみれぐさ

四月

うららかや　女つれだつ　嵯峨御室　　正岡　子規

麗（うら）らか――（すべての物がのどかに輝く。）

なにごとも四月馬鹿とて笑いおる　嶋田　青峰

おほかたは　一会の名詞　鳥雲に　鷹羽　狩行

天辺より落ち来る鳥に風光る　沢村　寒桜

暖か、ぬくし
龍天に昇る　春の盛んな気に乗じて龍が昇天する。

火の国も　海の前後や　風光る　河東碧梧桐

のどかさに寝てしまいけり　草の上　松根東洋城
長閑（のどか）――（のんびりとおだやかな春の気分。）

見おろせば　長閑（のどか）に暮るる　あかね雲　辻本　千代

山の湯や　だぶりだぶりと　日の長き　　一　茶

日永、遅日。

蜃気楼、逃げ水、亀鳴く、田のねずみ　化してうづらとなる。

ＪＲ宝塚線脱線事故、４・２５ネットワーク。

目つむれば　若き我あり　春の宵　　高浜　虚子

春暁、春の夜明け、春は曙、春の暮れ、春の宵。

春深し、昼は霞、夜は朧（おぼろ）。春日傘。

辛崎（からさき）の松は花より朧（おぼろ）にて　　芭　蕉

辛崎の松は琵琶湖西岸、大津の北四キロにあり近江八景の一つ。

花は長良山（ながらやま）の山桜。

湖水の一面朧（おぼろ）に霞みわたる中、湖岸の辛崎の松は、

背後の山の桜よりさらに朧（おぼろ）で風情が深い。

おぼろ満月　垂直に那智の瀧　　黒田　杏子

春の夜や　籠り人(こもりど)ゆかし　堂の隅(すみ)　　芭　蕉

奈良長谷寺での句。
春の夜、寺に籠もって堂の隅で昼夜祈願している人がいる。
なんとなく心をひかれることだ。
長谷寺の籠り人には源氏物語の玉鬘(たまかずら)をはじめ、平安時代以来の物語や日記に登場する女性も多い。春夜の情緒がしっとりと漂う。
本尊は十一面観音。恋の成就を祈願するところとして知名。
私もいつの日か、可能ならば、
京都大原三千院の往生極楽院阿弥陀三尊のお堂に籠もりたい。

行きたい方へ　それからの　しゃぼん玉　　黛　まどか

都踊りはヨーイヤサ　ほほえまし　　京極　杞陽

たあいなき春夢なれども汗すこし　能村登四郎

ぶらんこに腰掛けて読む手紙かな　星野　立子

心うち　湿りて　拾う　桜貝　後藤　夜半

春の宵　妻の湯浴みの音聞こゆ　日野　草城

折釘に　烏帽子（えぼし）かけたり　春の宿　蕪　村

紅閨に　かざし落ちたる　夜半の春　泉　鏡花

春の夜の乳房（ちぶさ）も　茜（あかね）さしにけり　室生　犀星

ぬかづけば　われも善女や　仏生会　　杉田　久女

地を指せる御手より甘茶落ちにけり　　中村草田男

雲のあゆみ　水の行くかたや　仏生会　　加舎　白雄

灌仏（かんぶつ）の日に生まれあふ　鹿（か）の子かな　　芭　蕉

花祭り四月八日、潅仏会、花御堂、奈良にて。

一つ根に　離れ浮く葉や　春の水　　高浜　虚子

蛤のかにかく重し　数は知らず　　林　翔

古池（ふるいけ）や　蛙飛（かはづと）びこむ　水（みず）の音（おと）　　芭　蕉

幽玄、閑寂を宗とした蕉風に開眼した句。

蛙といえば従来はその鳴き声を詠むものとして扱われていたが、飛び込む音を詠んで春の静けさを表現した。

和歌連歌では用語素材に制約が多く固定化されてきた。

芭蕉は和歌連歌の優美の概念に漏れたところに新しい俳諧的素材があり、俳諧には通俗の持つ意味の深さ、ジャンルの幅の広さがあると主張した。

ポチャッという、ややユーモラスな音に、荒れた古池を配することによって、そこに独特の枯淡閑寂の卑俗美を打ちだしている。この池は芭蕉庵の傍らの池。

機知、こっけいな連歌という俳諧の伝統は維持している。

あとは再びもとの静寂。

ひらひら　蝶は　うたへない　　山頭火

方丈の大ひさしより春の蝶　　高野　素十

低く来る　蝶の視力を考える　　池田　澄子

口曲げし　それがあくびや　蝶の昼　清崎　敏郎

蜂の尻ふわふわと針をさめけり　川端　芳舎

死にさそふものの蒼さよ　誘蛾灯　山口　草堂

安居とは　石あれば腰をおろすこと　高浜　虚子

四月十六日から三ヶ月

牧の牛　濡れて　春星満つるなか　加藤　秋邨

ぶらんこが　ふたつあるから　気を許す　小出　智子

こぶし咲き　今も変わらぬ時の鐘　茂木ひろし

もくれんの花をせかすや　雨の音　　青木　五郎

こぶし→もくれん

樫（かし）の木の花にかまはぬ姿かな　　芭　蕉

華々しい桜をよそに。樫の木―京都の俳人三井秋風の隠棲ぶりを称賛。

日は花に暮れて　さびしや　あすなろう　　芭　蕉

翌檜（あすなろう）――明日は檜（ひのき）になろう

職退いてからの男に朝が来る　　時実　新子

わたくしの靴を揃えてくれた人　　坂東乃理子

あのひと　どうしているのだろう

手を重ねあって　真意は聞かぬまま　萩原　華雲

破られるだろう手紙　書いている　近藤ゆかり

踏青や　裏戸に出づれば　桂川　内藤　鳴雪

青き踏む　産み月の腹誉められて　吉田　初江

むっとして　戻れば　庭に柳かな　大島　蓼太

ひたいには　こらえ涙のしわができ　佐々木イネ

ゆく春や　おもたき琵琶の抱心（だきごころ）　蕪　村

遅き日の　つもりて　遠き　むかしかな　蕪　村

花の下　ぢぢばば踊る　みな笑ふ　　河野　静雲

春は桜花に象徴され、昼は霞、夜は朧、ゆったりした春の駘蕩の気分。

旅衣　花衣とも　なりながら　　星野　立子

夜桃林を出て　あかつき嵯峨の桜人　　蕪　村

俳人加藤暁台と伏見及び嵯峨に遊びに行ったときの句。
暁台の「暁」の字を「あかつき」に掛けている。
夜に伏見の桃林を出て、明け方にはもう嵯峨の花見の人となっているよ。

花に舞はで　帰るさにくし　白拍子　　蕪　村

この爛漫たる桜の花の中に白拍子が舞うこともなく
帰ってしまう様子である。心憎いことだ。
白拍子は平安時代、男性の衣装を着て舞うのを生業とする女性のこと。

山又山　山桜又山桜　阿波野青畝

さまざまのこと思い出す桜かな　芭蕉

奈良七重（ならななへ）　七堂伽藍（しちだうがらん）　八重桜（やへざくら）　芭蕉

古（いにしへ）の奈良の都の八重桜　今日九重（ここのへ）に匂いぬるかな　詞歌集

を踏まえている。

菊の香（か）や　奈良には古き仏達（ほとけたち）　芭蕉

物ほしや　袋のうちの月と花　芭蕉

布袋和尚が大きな袋を背負っている姿の絵を見ると、
あの中には春の花と秋の月の風雅の材がいっぱい詰まっている
ように思えて、そぞろものほしい気持になるよ。

ちるさくら　海あをければ　海へちる　高屋　窓秋

満開の花に　脇役主役なし　安部　桂

観音の甍(いらか)見やりつ花の雲　芭　蕉

浅草観音、瓦葺屋根、咲き連なった桜。

さくら　さくら　散りて　佳人の夢に入る　上田　無腸

桜散る　背中さすってくれますか　楢崎　充代

花手折る美人縛らん　春一夜　高井　几董

愛咬や　はるかはるかに　さくら散る　時実　新子

夕桜　あやうくハイと言いそうに　池田　澄子

マハ椅子にもたるるごとくに花疲れ　阿波野青畝
　ゴヤの裸のマハ

目薬のおほかた頬に　花の昼　安住　敦

死支度（しにじたく）　いたせ　いたせと　桜かな　一　茶

花冷えに　欅は　けぶる　月夜かな　渡辺　水巴

何といふことのなき日の　さくら散る　桂　信子

春の月　のぼりて暗き　波間かな　後藤　夜半

貝の砂　椀に残れり　法然忌　鈴木　鷹夫

青蛙　おのれもペンキぬりたてか　芥川龍之介

菜の花や　月は東に　日は西に　蕪村

物種（ものたね）の　袋（ふくろ）ぬらしつ　春の雨　蕪村

種物（たねもの）（栽培用の野菜や草花の種）の入った袋を
春の雨が次第に濡らしていく。
春、種を水に濡らしてから蒔く。
そういえば、そろそろ種蒔きをする頃だなあ。

木瓜（ぼけ）咲くや　余震のつづく　街に住み　北條　幸夫

晴天や　白き五弁の梨の花　原　石鼎

チューリップ散って　一茎　天を指す　貞弘　衛

燃えつきし焔の形　シクラメン　田川飛旅子

雲低し　満天星に雨よ細く降れ　水原秋櫻子

死ぬものは死にゆく　つつじ燃えており　臼田　亜浪

げんげ田を見尽くし　遍路　万願寺　山口　誓子

芝ざくら　好天あますところなし　石原　舟月

昏るるとき　白ききわみよ　花水木　中村　苑子

息つめて　春りんどうの咲くといふ　岸田　稚魚

藤の花長うして　雨降らんとす　正岡　子規

熱高く　睡るフリージアの香の中に　古賀まり子

都忘れ　ふるさと捨ててより久し　志摩芳次郎

山吹の一重の枝の重なりぬ　高野　素十

ほろほろと山吹散るか　滝の音　芭　蕉

吉野川の急流、西河の滝、別名吉野大滝。
母は滝が好きだった。石川啄木も好きだった。
笑うから楽しくなる。泣くから悲しくなる。
滝を見ていると大自然の懐中に溶け込まれる。

シャンソンを聴く　薄明かりの忘れな草　菊池つねこ

たんぽぽのサラダの話　野の話　高野　素十

日だまりに雛菊　保育園の庭　大屋　達治

花弁の肉やわらかに　落ち椿　飯田　蛇笏

蕪（かぶら）ひとつ　畝（うね）にころげて　茎立てる　阿波野青畝

エリカの咲く　ひとかたまりの濃紫　草間　時彦

おおらかに山臥す蓮華　田の牛も　石田　波郷

よく見れば　薺（なずな）花咲く　垣根かな　芭　蕉

「よく見れば」に花の姿態が言いこめられ、自然の隠微な営みを凝視する観照態度が出ている。

日頃見慣れて気にもとめない垣根だが、よく見てみると、貧相で人に見向きもされないなずなの花が咲いているよ。

荘子哲学の万物一如（いちにょ）、万物静かにみれば物皆自得（ものみなじとく）の自然観に格別深い関心を寄せていた芭蕉は、次のように主張した。

造化（ぞうか）に順い造化に帰れ。
松の事は松に習（なら）へ。竹の事は竹に習へ。
習へというのは物に入りてその微（び）に顕れて
情感（じょう）ずるや句のなるところなり。
その物より自然（じねん）に出（い）づる情にあらざれば
物我二つになりてその情誠に至らず。
物の見えたる光、いまだ心に消えざるうちに言葉につなぎとめよ。

わさび田を溢れる水の岩走り

福田　蓼汀

青麦の穂の鋭さよ　日は白く　　篠原　鳳作

今日もまた　一輪草をいとほしみ　　宮井　和子

暮れの春　仏頭のごと　家に居り　　岡井　省二

行く春や　鳥啼き　魚の目は泪

春も終わろうとしている日、奥の細道へ出立する。
千住まで見送られて、別れの悲しさに、鳥は啼き、
魚は目に泪をたたえている。
時を感じては花にも泪をそそぎ、別れを恨んでは鳥にも心を驚かす　杜甫
を心に置いた発想。

行く春を近江の人と惜しみける　　芭蕉

琵琶湖を望んで湖水がおぼろにかすんで春を惜しむ。

五月

琵琶行（びわかう）の夜　三味線の音霰（おとあられ）　芭蕉

白楽天「琵琶行」を踏まえる。

茶摘唄　木陰は深くなりにけり　外川　飼虎

点心は　貧しけれども　新茶かな　芥川龍之介

種まきし　上にこまかな夜気が乗る　平畑　静塔

塗り上げし畦の掌型へ　夕日澄む　吉田　鴻司

メーデー五月一日、八十八夜　五月二～三日ごろ　別れ霜

衣かえて　愛怨の言　かわしおり　　石原　八束

一つ脱いで　うしろに負ひぬ　ころもがえ　　芭　蕉

更衣（ころもがえ）――五月一日または六月一日。

菖蒲湯や　菖蒲　寄りくる　乳（ち）のあたり　　白　雄

端午　五月五日

菖蒲湯　菖蒲が邪気除けに使われる

男の子の祝い日、こどもの日、　菖蒲――しょうぶ――尚武

早乙女―女の家、―ケガレ、キヨメの思想。女性が菖蒲（邪気を払う）を葺いた家に籠もり、身の穢れを落として、早乙女となって田植えを迎える準備をする。陰暦5月は田植えに伴う禁欲期として物忌みの月とされる。

はなびらの垂れて静かや花菖蒲　　高浜　虚子

笈（おい）も　太刀（たち）も　五月に飾れ　紙のぼり　芭蕉

福島県飯坂医王寺―源義経の笈・太刀を宝物として秘蔵。

あやめ草　足に結ばん　草鞋（わらじ）の緒（お）　芭蕉

人も旅人　われも旅人　春惜しむ　山口青邨

行く春、春惜しむ、暮れの春、夏近し。

夏

立夏五月六日頃

薄暑

夏めく思いをもつ候、木陰を求める気持ちをかすかに抱きはじめるころ。

卯の花の咲く月、聖母の月、入梅雨前の気持ちのいい季節。

薪能、やませ。

夏河（なつかわ）を越すうれしさよ　手に草履（ぞうり）　蕪村

愁ひつつ　丘に登れば　花いばら　蕪村

花茨は野生の薔薇の花

薔薇の香か　今ゆき過ぎし人の香か　星野　立子

葵祭　牛車の牛も　草履　履く　　安部　桂

祭りといえば、葵祭り　京都下鴨神社上賀茂神社　五月十五日

痩せ蛙　負けるな　一茶ここにあり　　一　茶

朝日より　むしろ夕日の麦の秋　　百合本暁子

道　問えば、麦を指しをり　麦の秋　　黛　まどか

麦の穂を力につかむ別れ哉　　芭　蕉

別れの悲しさに身体の力も抜けてよろけそうになるのを、
道端の麦の穂に取りすがって支えながら、やっと挨拶をかわす私である。

麦秋や　乳子に噛まれし　乳の創（きず）　　橋本多佳子

母の日五月第二日曜日

うすづくや　穂麦（ほむぎ）が中の水車（みずぐるま）　蕪村

神戸市生田川布引の滝を見てきた帰りに。
うすづく――臼に穀物などを入れて杵でつく。夕日が山に入る。

母と子が　蕗（ふき）の皮むき　語らへり　安部桂

昔の家庭は日常の家事が語らいの場となっていた。

相槌を打ちつ休まず蕗をむく　高橋多恵子

夕刊を読む　そら豆のゆだるまで　木内怜子

初なすび　水の中より跳ね上がる　長谷川櫂

熱の子の手の夏みかん　ころげだす　飯田龍太

たけのこと雨を背負いて　妻もどる　田中　重実

遠近（をちこち）に滝の音聞く　若葉かな　蕪　村

若葉、新緑、新樹―新緑のすがすがしい季節。緑、青。

目には青葉　山時鳥　初鰹　山口　素堂

こだまして　山ほととぎす　ほしいまま　杉田　久女

若葉して　御目（おんめ）の雫（しずく）　ぬぐはばや　芭　蕉

奈良唐招提寺鑑真和尚の尊像を礼拝して

あらたふと　青葉若葉の日の光　芭　蕉

日光東照宮に参詣して

清滝や　波に散りこむ青松葉　　芭　蕉

清滝川―京都嵯峨から保津川に注ぐ渓流

正論を通して虚し　一日（ひとひ）あり　　福岡　重人

人差し指　指さすだけで　人は死ぬ　　時実　新子

老人はこわいぞ　呆けの武器を持つ　　柴田　午朗

不整脈あり　豌豆を剥きこぼし　　日原　輝子

結婚指輪　時々　落としそうになる　　小林こうこ

ブラウスを白く着てゆく　別れかな　　横倉　道子

ひなげしを購(か)えば　百日愛される　大西　康世

吉野山　静かに余花の終わりけり　荒木春雪子

春に遅れて咲く桜を余花という。山櫻が多い。

菩提樹の花　匂いきし　門灯(あかり)　大橋ごろう

沙羅の花　昨日の沙羅の上に落つ　桐村日奈子

白藤や　揺りやみしかば　うすみどり　芝　不器男

桐の花咲けば　匂える闇の色　千代田葛彦

桐の花五月～六月。桐一葉八月。桐の実十月。

牡丹蕊（しべ）深く分け出づる蜂の名残り哉　　芭蕉

牡丹は花の王、芍薬は花の宰相

一日に　しべ　ゆるびたる　牡丹かな　　後藤　夜半

はなやかに　しずかなるものは　牡丹かな　　暁　台

牡丹　散りて　打ち重なりぬ　二三片　　蕪　村

庭芝に　小みちまはりぬ花つつじ　　芥川龍之介

くもり来し　ひかりのなかのアザミかな　　久保田万太郎

咲き充ちてアカシアの花汚れたり　　高花　年尾

老神父　カーネーションを持ち　散歩　星野　立子

墓に挿す　矢車草の一掴み　綾部　仁喜

石楠花や　朝の大気は高嶺より　渡辺　水巴

束で持ち　鈴蘭の花こぼしゆく　松崎鉄之助

曇天の耐えに耐えおる大でまり　篠田悌二郎

テッセンの花　空中に遊び咲く　高木　晴子

芥子開く　髪の先まで寂しきとき　橋本多佳子

野茨に　からまる萩のさかりかな　芥川龍之介

紅薔薇の　深きに抱ける　ひとしずく　　黛　まどか

薔薇あまた咲かせて苦労抱え込む　　檜　紀代

地球流転　春を豪奢に捨てながら　　葦　妙子

草笛を吹いて男を眠らせぬ　　来住タカ子

辻能の　班女（はんじょ）が舞いや　夏柳　　河東碧悟桐

ほめてさえやれば　伸びてゆく花もある　　時実　新子

六月

暑き日を　海に入れたり　最上川　芭蕉

万緑や　おどろきやすき仔鹿いて　橋本多佳子

緑蔭に　三人の老婆笑えりき　西東　三鬼

緑蔭や　白きブラウス車座に　鮫島　直昭

灯台を包みて　夜も風薫る　鷹羽　狩行

薫風の素足　かがやく　女かな　日野　草城

南風（みなみ）、青嵐、風薫る、薫風――（南風が緑の草木を渡って匂うように吹く）

夕飯にかますご食えば風薫る　野沢　凡兆

黒猫のさし覗きけり青簾（すだれ）　泉　鏡花

露地口や　女の袖に夏帽子　泉　鏡花

夏の日中に慌ただしく訪ねてきた実業家風の中年の旦那に、
若い娘むすめした頼りなげな浴衣姿の女が、
髪のほつれも十分に撫でつけぬまま、
名残惜しげにカンカン帽をそっと差し出す。

単帯（ひとえおび）きりりと覚悟きまりけり　大谷　史子

うきくさの花から乗らん　あの雲へ　一　茶

五月雨（さみだれ）の　降り残してや　光堂　芭　蕉

芭蕉は不易流行の芸術感を主張した。

光堂は悠久の姿を保っている。不易である。変わらない。

その反面、歌に出てくる史跡が、歳月の重みの中で変化流転し、さだかな跡もとどめなくなっている。流行している。変わっている。

不易と流行は同じ風雅の両面であり相互補完関係にある。

これは荘子のいう造化（ぞうか）の秘密を示すものである。

物を見る目もその表現方法も、いつまでも同じ状態にとどまっていられる筈がなく、変化流行している自然や人生の実相に迫り、新しい真実を追い求めていく自覚的なプロセスにおいてのみ、鮮烈な生命が作品の内部に躍動してくると、芭蕉は主張した。

五月雨（さみだれ）を集めてはやし　最上川（もがみがわ）　芭蕉

五月雨に鳰（にお）の浮き巣を見にゆかん　芭蕉

琵琶湖にて

さみだれのあまだればかり浮御堂　　阿波野青畝

梅雨見つめをれば　うしろに妻も立つ　　大野　林火

梅雨（六月十二日頃から一ヶ月）

立春から一三五日目。　芒種（六月六日頃）の後のみずのえの日が梅雨入り。

小暑の後のみずのえの日が梅雨明け。

（陰暦）五月雨（さみだれ）、（陰暦）五月晴れ、

梅の実の熟する頃の雨。　走り梅雨―梅雨―送り梅雨―戻り梅雨

雨安居―安居は雨季の意味。

ふところに乳房ある憂さ　梅雨ながき　　桂　信子

雷雨下の乳房は濡れて滴れり　　加藤　楸邨

蛍火の明滅滅の深かりき　　細見　綾子

脂粉なき少女とともに　蛍狩り　　山口　誓子

この蛍（ほたる）　田毎（たごと）の月に比（くら）べみん　　芭　蕉

滋賀県大津市瀬田の川面（かわも）に蛍の大群が光を映すのを見て。
長野県更級郡信州冠着山姨捨山の山腹の棚田のひとつひとつに映る月と比べてみたいと。

元日は　田毎（たごと）の日こそ恋しけれ　　芭蕉

田毎の月の美しさが今も瞼（まぶた）を離れず、
元日の今日、かの田毎に初日の出の映じている光景が想像され、
恋しさにかられる。

目に残る吉野を瀬田の蛍（ほたる）かな　　芭　蕉

吉野の花の絢爛さと瀬田の蛍が光の群舞を演ずる眼前の眺めの華麗さ。

その両者を二重写しにして豪華な美の世界を描いた。

さつき雨　田毎の闇となりにけり　蕪村

蛍籠　昏(く)らければ　揺(ゆ)り炎(も)えたたす　橋本多佳子

うつす手に　光る蛍や　指のまた　炭太祇

草の葉を落つるより飛ぶ蛍かな　芭蕉

ゆるやかに着て　人と逢ふ　蛍の夜　桂信子

梅雨晴れ間　木立に残るしずくかな　原田かほる

三太郎の日記も　カビの書となれり　湯沢瑶子

幸せを分けて下さい　傘の中　平井　玲子

雨音や　緋色の傘の夫の客　山崎　佳子

旅の髪洗う　卯の花腐しかな　小林　康治

卯の花のこぼるる蕗の広葉かな　蕪　村

なめくじの意思まで殺す　塩を打つ　辻田　克己

短夜の　明けゆく　水の匂かな　久保田万太郎

早苗田や　あふるるほどの　水を得て　岡村　正江

田植え、一ケ月ほど前の八十八夜に籾播き、次に代掻きを終わった田へ、

苗代から早苗（稲の苗）を移し植える作業。
田植え笠をかぶった紺着物で未婚の娘、早乙女が、田植え唄を歌いつつ作業する。
農家農村は、田植え、秋の穫り入れには、農村が結束、共同作業となる。

二三歩に地を失なえり　五月闇（さつきやみ）　井沢　正江

夏草や　兵（つわもの）どもが夢の跡　芭蕉

岩手県平泉源義経高館にて

夏草に　延びて　からまる　牛の舌　高浜　虚子

ものや思ふと人の問ふまで　夏痩せぬ　夏目　漱石

生き堪（た）へて　身に泌（し）むばかり　藍浴衣（あいゆかた）　橋本多佳子

舞殿の屋根を滑りて夏落ち葉　　田中　裕明

夏至（六月二十二日頃）

病葉（わくらば）が落ち　働ける蟻かくす　　田中　灯京

山へ紙　ひらひらとんで御祓（みそぎ）かな　　宇佐美魚目

御祓六月三十日

形代として両腕のなかりけり　　川口　未来

夏祓　形代　茅の輪

水の中　指やわらかく　苺洗う　　大橋　敦子

串刺しの鮎まだ濡れて火を囲（め）ぐる　　瀧　春一

叩かれて　昼の蚊を吐く　木魚かな　　夏目　漱石

這い出でよ　飼屋が下の蟇の声　　芭　蕉

蚕を飼っている作業小屋の下から蟇の声がしているよ。
蟇よ、顔を見せに這い出てこい。
朝霞かひやが下に鳴く蛙　　万葉集
を踏まえている。

雹　うって　摩周湖の藍　かげりくる　　石原　八束

ほととぎす　大竹藪を漏る　月夜　　芭　蕉

あをぞらの果ては闇なり　ほとぎす　　岩永　佐保

まづ頼む　椎(しひ)の木もあり　夏木立(なつこだち)　芭蕉

奥の細道の漂泊の長旅の末にしばしの安住を求めて滋賀県大津市石山の奥、幻住庵(げんじゅうあん)に入ってみると、傍(かたわ)らの夏木立の中に椎の木もあり、まずは、何はともあれ、ほっとする心地だ。

丸盆の椎に昔の音聞かむ　蕪村

円形の丸盆にのせてある食用の椎の実の音を聞きながら芭蕉の昔を偲ぼうではありませんか。

旅人の心にも似よ　椎の花　芭蕉

芭蕉の俳諧の世界は椎の花のように控えめで閑寂な趣のものである。風雅の侘(わ)びを尋ねて山深い木曽路を行く旅人の心にこたえて、その侘びしくつつましい花をひっそりと咲かせよ、椎の花よ。

憂き我をさびしがらせよ閑古鳥（かんこどり）　芭蕉

憂鬱な気分でいるよりも、寂しいなら寂しいとはっきり感じたい。山里にこはまた誰を呼子鳥（よぶこどり）　独り住まんと思ひしものを　西行への共感から成った新着想の作。

閑古鳥、呼子鳥は、ともに郭公（かっこう）の異名。

憂きわれを寂しがらせよ秋の寺　芭蕉

憂（う）き我に　砧（きぬた）打て　今は止（や）みね　蕪村

止みね――止んでしまえ

この宿は水鶏（くひな）も知らぬ扉（とぼそ）かな　芭蕉

水鳥は人家の戸をたたくようにカタカタと鳴くので、古来、人を訪ねるさまに言いなす。

夕風や　水青鷺の脛を打つ　蕪村

疲れ鵜の叱られてまた入りにけり　一　茶

はやる鵜の引き戻さるる綱の張り　辻　恵美子

おもしろうて　やがて悲しき　鵜舟哉（うぶねかな）　芭　蕉

美濃長良川にて

謡曲「鵜飼（うがい）」を心に置いた作。

面白（おもしろ）の有様や。底にも見ゆる篝火（かがりび）に驚く魚（うお）を追ひ回し、

潜（かづ）き上げすくひ上げ、暇（ひま）なく魚を食ふ時は、罪も報（むく）ひも後（のち）の世も、

忘れ果てて面白や。

鵜舟（うぶね）の篝（かがり）、影消えて、闇路（やみぢ）に帰るこの身の名残惜しさをいかにせん。

岩魚釣り　膝に大傷つけ戻る　皆川　盤水

谷に鯉　もみあう夜の歓喜かな　金子　兜太

とんぼ生まれ　水草　水になびきけり　久保田万太郎

蝶の舌ゼンマイに似る　暑さかな　芥川龍之介

群れ離れ　又　群れに入る　目高かな　野田　晶子

産卵の金魚のくぐる　ほてい草　高畑　圭

やれ打つな　蠅が手をする　足をする　一　茶

馬ぼくぼく　われを絵に見る　夏野かな　芭　蕉

来し方のこと　さまざまに　遠郭公（とおかっこう）　島田　登代

曇天や　蝮(まむし)生き居る　ビンの中　芥川龍之介

千年を目覚めてみれば　サンショウウオ　野中　亮介

青梅に手をかけて寝る　蛙(かわづ)かな　一　茶

紫陽花(あじさい)や　白よりいでし浅緑　渡辺　水巴

湯浴みしてきて　紫陽花の前を過ぐ　山口　誓子

つなぎし手　あじさい　笑ふ　木陰かな　北野　美樹

紫陽花や　滝夜叉(やしゃ)姫が花かざし　永井　荷風

風が吹き　鷺草（さぎそう）の皆飛ぶが如（ごと）　高浜　虚子

黒みつつ充実しつつ　ひまわり立つ　西東　三鬼

今朝咲きし　くちなしのまた白きこと　星野　立子

酔顔に　葵こぼるる匂いかな　去　来

夏あざみ　千本の針　育ちおり　中　近江

芍薬を嗅げば女体となりいたり　山口　誓子

芍薬は花の宰相

嫁ぐ日の　芍薬　金の蕊を秘め　波戸岡　旭

芍薬や　机の上の紅楼夢　永井　荷風

世の人の見つけぬ花や　軒の栗（くり）　芭蕉

栗という文字は西の木と書きて、西方浄土に便りありと、
行基菩薩（ぎょうきぼさつ）の、一生、杖にも柱にもこの木を用い給ふとかや。
栗の花は淡緑色で葉の色にまぎれて目立たない。
世塵を避けてひっそりと暮らす俳人であり僧侶でもある可伸の
奥ゆかしさを、その家の軒端の栗の花に託して詠んだ。

悪女かもしれず　苺の紅つぶす　三好　潤子

干草（ほしぐさ）の山が静まる　かくれんぼ　高浜　虚子

一人立ち　一人かがめる　あやめかな　野村　泊月

宵々の雨に音なし　杜若（かきつばた）　蕪村

橘（たちばな）の　かは　たれ時や　古館（ふるやかた）　蕪村

橘（たちばな）の〝香〟

〝彼〟は誰？　と、はっきり物が見えない時間帯。

人に逢うも　花橘の香に逢うも　山口　青邨

病人に　夾竹桃の赤きこと　高浜　虚子

雑草に交じらじと　紫蘇匂いたつ　篠田悌二郎

どくだみの花活き活きと風雨かな　大野　林火

花南天　実る形をして重し　長谷川かな女

こんこんと水は流れて　花菖蒲　　臼田　亜浪

野兎わたる　濁りすぐ消ゆ　水芭蕉　　沢田　緑生

顔のなき石仏おわす　青すすき　　吉田　由治

青すすき　刃物のようで　しなやかで　　原田　妙子

七月

閑（しづ）かさや　岩にしみ入る蝉（せみ）の声　　芭　蕉

山形県立石寺にて　この蝉はにいにい蝉

（松蝉は五月春。　ヒグラシ，法師蝉は秋。　その他の蝉は夏。）

岩の内奥までしみとおる感じの「シミイる」（イ音の連続）が
静寂感をかもしている。

やがて死ぬ　けしきは見えず　蝉の声　　芭蕉

明日の命を知らず、ただ今日の生を必死に生きる短命の蝉の声に
無常迅速（むじょうじんそく）の本質を見た。

空蝉（うつせみ）の念力の爪ゆるめざる　　中塚　久恵

蝉しぐれ　骨壷の白　抱きにけり　　日原　輝子

煩悩をえぐるがごとし　蝉時雨　　真田　孝夫

唖蝉も　鳴く蝉ほどは　いるならむ　　山口　青邨

一竿は　死に装束や　土用干し　　森川　許六

盛夏、晩夏。木の枝払う（七月好期）。（剪定――春。）
半夏生、七月二日頃。田植えの終わる頃。からすびしゃく。
小暑七月七日ごろ。

松陰に　鶏　腹ばえる　暑さかな　　芥川龍之介

市中（いちなか）は　物の匂いや　夏の月　　凡　兆

これはもう　裸といえる水着かな　　大野　朱香

おそるべき　君らの乳房　夏きたる　　西東　三鬼

手に触れし汗の乳房の冷たかり　　野見山朱鳥

香水の一滴づつにかくも減る　山口波津女

ゆきずりの香水の香ぞ　憂いに似(に)　榎本冬一郎

恋ボートぶつかり合うて離れけり　鈴木　芽莉

草笛の遠ざかりゆく　千曲川　遠藤若狭男

遠雷(とおらい)や夢うつつなる寂しさに　山西　雅子

白靴の汚れが見ゆる疲れかな　青木　月斗

風鈴の　もつるるほどに　涼しけれ　中村　汀女

梅酒に　身を横たふる　松の風　前田　普羅

馬洗ふ　蒼茫（そうぼう）として　出羽の山　加藤　楸邨

兎も　片耳垂るる　大暑かな　芥川龍之介

ほのかなる少女のひげの　汗ばめる　山口　誓子

汗かきて　すこし私の蒸発す　坊城　俊樹

川風に　雪洞（ぼんぼり）運ぶ　床涼（ゆかすず）み　高浜　虚子

病室の見える坂道　白日傘　黛　まどか

美しき　緑走れり　夏料理　星野　立子

夏料理

洗膾（あらい）――洗い鯉、洗い鱸、洗い鰈。

鱧――祭り鱧。　鰻、穴子、　土用蜆、鮎、鯵、鰹。
冷やそうめん、そうめん流し、葛そうめん、冷やし麦。
鮓、甘酒、焼酎、ビール、冷やし酒。ラムネ、ソーダ水、サイダー。
アイスコーヒー、アイスティー、氷菓、かき氷、水羊羹、葛練、砂糖水。
さくらんぼ、パセリ、玉葱、夏大根、イチゴ。

日焼け顔　見合いて　うまし　氷水　　水原秋桜子

蹠(つまづ)いて　ひとり笑ひて　麦茶かな　　石原　八束

びくのまま　土用鰻の到来す　　亀井　糸遊

水桶(みずおけ)に　うなづきあふや　瓜茄子(うりなすび)　　蕪　　村

さりげなき立ち居振る舞い　藍浴衣　　稲畑　汀子

大の字に寝て　涼しさよ　涼しさよ　　一　茶

湯あがりの　風をまとへる　端居（はしい）かな　　西山　春文

さりげなくいて　もの思ふ　端居かな　　高橋淡路女

片陰を　うなだれてゆく　たのしさあり　　西垣　脩

梅田又は難波から本町経由阿波座まで約一時間

命なり　わづかの笠の下涼（したすず）み　　芭　蕉

年たけて　また越ゆべしと思ひきや

命なりけり　佐夜の中山（西行）を踏まえている。

佐夜の中山――静岡県にある尾根

下涼み――木の下などで涼むこと

かつぎたる日傘がまわる立ち話　　佐藤　漾人

楽しさや　青田に涼(すず)む　水の音　　芭　蕉

顔くらくして　もう垂らす青簾(すだれ)　　中山　禎子

梅雨明け七月半ば過ぎ、猛暑、一気に暑くなる。

炎帝（冬帝――冬）　暑い――あつ――夏

土用、七月二十日頃からの十八日間、暑中、暑中見舞い。

極暑、酷暑、炎暑、七月末～八月上旬。くらげ、土用鰻、土用蜆。

大暑七月二十三日二十四日頃。散水車。土用芽

汗、ハンカチーフ、白い靴、香水、裸、肌脱ぎ、はだし、日焼け、

炎昼、炎天、日盛り、灼く、熱帯夜、風死す、シャワー、行水、髪洗う。

汗止むる眉　人にある不思議さよ　　羽生田めぐ美

しんなりと汗かき　われの古びたり　宮坂　静生

仰ぎ見て　旱天　すがるなにもなし　石原　舟月

はまゆうや　沖に停泊船見えて　渡辺　白夜

島島や　千千に砕きて　夏の海　芭　蕉

宮城県松島にて。造化の神が大地を砕いた。波が砕ける。

涼しさや　山は沈黙　海多弁　安部みどり女

休暇、遊び　の季節。

山開き　本来は山岳信仰による修験者の行事

登山、キャンプ、赤富士、

海開き　ヨット、サーフィン、海水浴、

帰省―お盆前後。夏休み七月二十日頃から八月末。

水鉄砲　親馬鹿の顔　打たれおり　岸田　圭子

身にひしと乙女の頃の水着着る　赤松　惠子

別な人　見ている彼のサングラス　黛　まどか

泳ぎ来し　髪をしぼりて妻若し　福永　耕二

散る波の岩にすばやき小蟹かな　大利　式子

バス降りて　陰なき道や　雲の峰　村井　泰彦

山も庭に動き入るるや　夏座敷　芭蕉

那須黒羽（くろばね）の館代（かんだい）である秋鴉（しゅうあ）の屋敷に招かれて

夏の涼しげな座敷に坐って見事な庭を眺めていると、
まるで眼前の山も動いて、庭の中に入ってくるような思いがする。
山もさらに堂の前に動き出でたるやう　伊勢物語七七段
を踏まえて趣向した。

両国の花火聞こゆる　月夜かな　正岡　子規

夜店の灯　背をやはらかく　押されつつ　黛　まどか

抱擁のはげしさ　花火　凍るまで　時実　新子

明石歩道橋事故、二〇〇一年七月。

溶けあわぬ二つの心　大花火　吉川　千秋

少女が女になった日の　まっかな夕日　時実　新子

滝の上に　水現れて落ちにけり　後藤　夜半

いづくにも　虹のかけらを拾い得ず　山口　誓子

点滴の母の目で追ふ　窓の虹　中本　萬里

一病に　生かされていて　虹仰ぐ　二戸ミチコ

生きいそがず　死にもいそがず　夕端居　藤田　清女

悟られた人の境地かな

涼しさや　鐘をはなるる　かねの声　蕪　村

お寺で時の鐘を撞(つ)いている。

ひとつひとつゆっくりと鐘を離れていく鐘の音のなんと涼しげなことか。

私は奈良市紀寺上幸町に住んでいるが、周辺にお寺が多く、
深夜まわりの音がなくなると、どこかのお寺の鐘が
内省をせまるように聞こえてくる。

人目には　涼しさうにも　見られつつ　星野　立子

某日や　風が廻せる　扇風機　正木　浩一

すこしづつ　指ほぐれゆく　児の昼寝　斉藤さとし

人を見て　またまた無理に昼寝かな　一　茶

夕立(ゆうだち)や　草葉をつかむ群雀(むらすずめ)　蕪　村

雲の峰(くもみね)　四沢(したく)の水の涸(か)れてより　蕪　村

冬にいったん凍りついた山々は、春の雪どけで再び春の水が四沢に満ち、
夏にはまたその水が蒸発して雄大な入道雲になる。――陶淵明。

雲の峰　禅の一書を携へて　　松宮　善之

道元禅師入門「山が動いている」出版に寄せて

折り紙や　慈父の無心に　虹の橋　　山田健二郎

道元禅師入門「山が動いている」出版のお祝いに千代紙を贈られて
児童館で折り紙を折って子等と遊ぶ恩深き人の姿を思い浮かべて

夫婦らし　ほほづき市の戻りらし　　高浜　虚子

鬼灯市（ほほづき）　女性子供の夏負けの厄除け　七月九、十日

滴（したた）れる岩に刻（きざ）める仏あり　　池内たけし

鉾立てて　常より高き　京の空　　安里　道子

夕風にととのう鉦（かね）や　祭り鱧（はも）　　桂　信子

家を出て手をひかれたる祭かな　　中村草田男

祭り　祓いと災い除けを行う諸社の夏の祭りの総称
賀茂祭（葵祭り）五月十五日
祇園祭八坂神社七月十六宵山、十七日山鉾。
地蔵盆七月または八月の二十四日。

浴衣（ゆかた）着て　少女の乳房高からず　　高浜　虚子

薫風にふくらみたがる巫女の袖　　黛　執

涼しさや　巫女のはかまのしづしづと　　金月　洋子

かたまりの水落ちる音　水を撒く　篠原　梵

夏風邪は　なかなか　老に重かりき　高浜　虚子

洗い髪　母に女の匂いして　岡本　眸

せつせつと眼まで濡(ぬ)らして髪洗う　野澤　節子

洗い髪結う間なくして人に逢う　下村　梅子

肌脱(はだぬ)いで　髪洗はんとしたるとき　高浜　虚子

浴衣着て　振る舞い変わる　奥座敷　辻本　武彦

鼻の穴　涼しく眠る　女かな　日野　草城

風に恋ひて　風に手折りて　忘れ草　黛　まどか

裸子（はだかご）や　涙の顔をあげて這ふ　野見山朱鳥

汗の玉　抱える花の束に落つ　長谷川かな女

日本よ　裸に似たる女来る　青島ゆみを

子には脛（すね）　国には老後　齧（かじ）られる　市川　茂

携帯も　電話もあって　電話なし　山内　祐次

擦り寄って　抱っこせがむ　小さな手　池田　魔女

うすもので歩めば　風の立ちにけり　楠田　伸彦

紅さして　寝冷えの顔をつくろひぬ　高浜　虚子

象潟(きさがた)や　雨に　西施(せいし)が　合歓(ねぶ)の花　芭　蕉

象潟―秋田県干潟。西施――中国春秋時代の美女。合歓――ネムノキ。湖畔に咲く合歓(ねむ)の花が雨に濡れて打ち萎(しお)れるさまは、美女西施が悩ましげに眉をしかめ、瞼(まぶた)を閉じて、うつむいて悩む顔を彷彿(ほうふつ)させる。

蘇東坡の詩「西湖」を踏まえている。

智恵子抄を思い出す。

病んだ智恵子に対する愛を、あそこまで昇華しきった高村光太郎に頭が下がる。

雪洞(ぼんぼり)に女の袖や萩の露　泉　鏡花

血を喀(は)いて　大夕焼けの中に臥す　石原　八束

山清水(しみず)　魂(たま)冷ゆるまで　掬(むす)びけり　臼田　亜浪

仏性といふは　涼しき山のこと　大石　悦子

真暗闇(まくらやみ)　持ち上げている　泉かな　中原　道夫

掬(むす)ぶより　はや歯にひびく　泉かな　芭蕉

女の素足　紅らむまでに砂丘ゆく　岸田　稚魚

レモンかじる日焼け少女の男時計　増子たかし

病院の椅子で被告の顔になる　時実　新子

いつはりも　いたはりのうち　水中花　鷹羽　狩行

止まるとも　動くともなき　金魚かな　三浦　善隆

いつ死ぬる金魚と知らず美しき　高浜　虚子

愚痴聞けば　ついと逃げ去る　金魚かな　福岡　山彦

毛虫焼く　火のめらめらと美しき　木下　夕爾

毛虫焼き了へて　蒼白たるべし　能村登四郎

こときれて　より黄金（くがね）濃きコガネムシ　戸恒　東人

泥鰌（どじょう）浮いて　鯰（なまず）も居ると言うて沈む　永田　耕衣

のぼりゆく草細りゆく　てんとうむし　中村草田男

煎られたる如く跳ねけり　あめんぼう　行方　克己

うじむしの意地ある如く歩みおり　白川　京子

木犀（もくせい）の　香に染（し）む雨の烏（からす）かな　泉　鏡花

いとなみのかくも静かに蟻の列　佐藤　博美

蜘蛛の囲の完璧にして夜となれり　槌田　紫緑

猫の子に嗅がれているや　かたつむり　椎本　才麿

薫風や　蚕（こ）は吐く糸にまみれつつ　渡辺　水巴

球形にならむと　トマト凸凹す　岩津　厚子

喪の席にいて　ひまわりを見ていたり　保坂　敏子

向日葵が好きで狂いて死にし画家　高浜　虚子

みな同じ向きで向日葵（ひまわり）咲きいたる　安部　桂

夏草の匂い残して刈られけり　角皆美代子

鈴蘭に米粒ほどの青つぼみ　藺草　慶子

じゅうやくや　集団疎開せし寺に　三浦　蕗

淋しくも　また夕顔のさかりかな　夏目　漱石

夕顔や恋の遊びも終わりとす　加藤三七子

柄には柄の　自由な心　さくらんぼ　後藤比奈夫

枇杷の種　こつんころりと独りかな　角川　照子

アカシアの花のこぼるるダム工事　佐々木紫乃

骨董のしなじなひろげ　花水木　長井まどか

歩いても歩いてもまだ水芭蕉　菖蒲　幸子

蓮の香や　水をはなるる茎二寸　蕪　村

二階より見えて　夜明けの夾竹桃　菖蒲　あや

採血や　雨後なお燃えて　さるすべり　楠本　憲吉

百日紅　今日も門扉を閉じし家　高橋　保博

おいらん草　外人墓地に咲きいでし　岡本　眸

サルビアの朱き花には　朱き茎　松井　季湖

沙羅の花　捨て身の落花惜しみなし　石田　波郷

焔(ほ)を吐いて　月下美人の開きそむ　石原　八束

月見草　鉄橋長く鳴り渡る　林　徹

酔いて寝む　撫子咲ける石の上　芭　蕉

袖につく　柳の虫や　蓮を見る　高浜　虚子

睡蓮の花閉づ　月光浄土かな　柴田白葉女

一樹ありて　ノウゼン絡む浜の町　金雄梅の門

ハマナスや　親潮と知る海の色　及川　貞

浜木綿に　ひたすら通ふ　波の音　　黛　まどか

グラジオラス　妻は愛憎鮮烈に　　日野　草城

夏薊　開かんとして棘を張る　　高橋　悦男

夕風や　ペチュニア駄々と咲き続け　　八木林之助

八　月

もの言えば　すべてが汗になりそうな　　勝村　博

毎年のことですが、今年のこの暑さこの炎暑を乗り切れるか、
どう乗り切ろうかという思いで、八月を迎えます。

炎天といのちの間（かん）にもの置かず　斉藤　玄

炎昼や　日照る石　またかげる石　伊丹三樹彦

静脈の浮き上がり来る酷暑かな　横光　利一

猶　暑し　骨と皮とになりてさへ　正岡　子規

日帰りの禿山（はげやま）越ゆる暑さかな　蕪　村

西日中（にしびなか）　電車のどこかつかみており　石田　波郷

風死して　くぼみの深き藤寝椅子　市あきら子

緑陰に　平常心を取り戻す　内藤　悦子

声出して　おのれはげまし　水を打つ

水を打つ　水のかたまりぶっつけて

草いきれ鉄材錆びて詰まれけり

石田あき子

大橋　敦子

杉田　久女

秋

立秋八月八日頃。

あかる、あかき。

秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる

炎暑はまさに厳しく夜も寝苦しいが、朝方、どこかに秋の気配を感じる月。

夏型気圧配置が一時的に衰える。夏の暑いゆえに時折感じる涼しさ。

炎暑のなかでも秋の気配を早く感じ取りたい思い。

残暑――立秋後の暑さ。残暑と言うも日中は酷暑炎暑猛暑である。

秋ひでり、ひでり、水虫、水あたり、日射病、打ち水。

この暑さは残りしばらくの辛抱、そういう気持ちにさせる言葉の智慧。

新涼――秋になってから立つ涼気、秋涼、爽涼、爽快、夜の秋、納涼、

風鈴、金魚、夏の宵、走馬灯、避暑、散水車、暑気払い。

秋は夕暮れ　　もののあはれ　寂しさ　蝉の死骸があちこちに。

夕方には　おしろいばな　赤トンボ　ひぐらし　いとおかし。　芭　蕉

あかあかと日はつれなくも秋の風　大西　定子

ひとことを言へば　角たつ　残暑かな

秋暑し　癒えなんとして　胃の病　夏目　漱石

牛部屋に蚊の声暗き残暑哉　芭　蕉

牛部屋には、牛に肥を踏ませようと、たくさんの芥(あくた)も入れて置く。
窓もなく暗く通気の悪い牛小屋は、むっと鼻をつく悪臭がこもり、
隅の暗がりでは蚊が鳴き、ひとしお残暑の暑苦しさを感じさせる。
中七に詩人的感覚が鋭い。
この句には生活臭を感ずる。土の臭いがする。
そこから宮沢賢治が連想される。

雨ニモ負ケズ、丈夫ナ身体ヲモチ、慾(よく)ハナク、決シテ怒(いか)ラズ、イツモ静カニ笑ッテイル、アラユルコトヲ自分ヲ勘定ニ入レズニ、ミンナニ「デクノボウ」ト呼バレ、誉メラレモセズ、苦ニモサレズ、サウイウモノニ、私(わたし)ハナリタイ。

塩置きに　牛の寄りくる　残暑かな　押領司雅俊

涼風(すずかぜ)の　曲がりくねって来たりけり　小林　一茶

流れ来る物を見ている端居かな　吉田　丁冬

端居して　窓いっぱいの山を見る　星野　椿

泣きなさい　笑いなさいと　踊りけり　竹南寺 摩耶

祭り　弘前ねぶた八月一～七日　青森ねぶた八月二～七日

秋田竿燈まつり八月三～六日
花火　淀川、宝塚――八月五日

好きな子の袖（そで）にふれたる　踊りの輪　角浜　栄一

初恋の人を探しぬ　踊りの輪　篠田　重好

会いたいという突き上げてくるおもい。

ひとときは　夕日を乗せて　ヨットかな　小島　健

波ゆきて　波ゆきて寄る　くらげかな　高野　素十

あかあかと　烏賊火は遠し　寝る時も　桂　樟蹊子

浜木綿の花の上なる浪がしら　神尾　季羊

はまなすや　今日　近近と　利尻富士　小島　健

川風の遊ぶ貴船の川床（ゆか）料理　内田　弘司

涼（すず）み床（か）や　下は川波　上は酒　西山　宗因

山の湯に　風やはらかき　星月夜　稲畑　汀子

七夕や　髪ぬれしまま　人に逢う　橋本多佳子

陰暦七月七日星祭

七夕や　わが織姫も老いけらし　松川斗四朗

荒海（あらうみ）や　佐渡に横たふ　天の河（がは）　芭蕉

新潟県三島郡出雲崎（いずもざき）より佐渡が島を見わたして。

芭蕉は佐渡を重罪人遠流（おんる）の哀史を背景に悲しく眺めている。
荒海と佐渡で陰うつな日本海の哀愁を形象化。これに銀河を配した雄大な宇宙的把握の中に、おのずから人間の卑小感、寂寥（せきりょう）感がこもる。
荒波すさぶ夜の日本海、はるかな闇の中に、佐渡の島影が黒々と横たわり、その沖天高く、銀河が横切って、初秋の冴（さ）えた夜空に光っている。

泥舟でいいではないか　星祭　　大木　孝子

秋涼し　手毎（てごと）に剥（む）けや　瓜茄子（うりなすび）　　芭　蕉

金沢の俳人斉藤一泉の松玄庵で。

持ち古（ふ）りし　夫婦の箸や　冷奴　　長谷川かな女

台風や　雲逃げて来る　逃げて来る　　福田　大志

台風、野分、秋出水、土用波。　龍（荒れた気象）　淵に潜む

めちゃくちゃな　どぜうの浮沈　台風来る　秋元不死男

台風のあと　しんとして月ゆがむ　日野　草城

野分先ず月の光を吹きはじむ　斉藤　玄

稲妻に　こぼるる音や　竹の露
竹がざざっと音を立てて　蕪　村

いなびかり　北よりすれば　北を見る　橋本多佳子

湖底より廃墟現る大旱（おおひでり）　宮下　翠舟

喜雨（きう）の来て　そこら忙し草の宿　五十崎古郷

田の干割れ　どんどん喜雨を吸い込みぬ　岩田　美蜻

雷雨きて　たっぷり効かすスパイスよ　福原　ゆり

秋立つや　身は　ならわしのよその窓　一　茶

この国は大きな碑なり　原爆忌　池田　功

原爆忌　広島一九四五年　昭和二十年八月六日午前八時十五分（黙祈）

長崎一九四五年　昭和二十年八月九日午前十一時二分（黙祈）

生き残り　たった一人の月見かな　横川　満

八月が　また　やって来し　また祈る　上村　敏夫

おそろしい生き地獄の荒れた孤独感。

子にはどうしても語り得なかったが、孫には伝えたくなった。

火の奥に　牡丹の崩るるさまを見つ　　加藤　楸邨

空襲　沖縄戦の悲劇　米軍無差別爆撃

川を見て　老人立てり　終戦日　　林　徹

終戦　午前十二時（黙祈）

終戦日一九四五年　昭和二十年八月十五日、ポツダム宣言受諾。

戦争は痛みである。平和は人の痛みをわかることである。

人の顔を笑顔にすることが平和につながる。

腹にすえかねる、ムカつく、キレルというなかれ。いい笑顔をつくろう。

玉音放送　あの日の暑さ　まだつづき　　高木夢二郎

石臼（いしうす）をまわしてみたし　終戦日　　弓削　季也

この家で果てむ　八月十五日　　内山　秀隆

夾竹桃は　火の色　敗戦日の記憶　　吉田　末灰

平和なレンズ　みがいてもみがいても　映る戦車　　高木夢二郎

悔しかったであろう犠牲の上に、戦後日本の経済成長がある。

人殺す正しさなどは　世にあらず　　高木夢二郎

自由と平和を堅持しよう。

過去から目をそらすのでなく、悲劇を未来のための教訓として活かそう。

我々の世代は戦前戦後を時代の区切りとみる。若い世代は東京オリンピック・米国ケネディ暗殺（S39年）や大阪吹田の万博（S45年）や阪神大震災（H7年）を時代の区切りとみる。戦前の暗い歴史を忘れてはいけない。

戦友と呼びたき妻と　冷奴　　西村　友男

どことなく　水音のして　盆の町　　岡本　眸

墓参り

盆八月十二日～十五日、迎え火、送り火、燈籠流し、流燈、精霊流し。

地蔵盆七月または八月の二十四日。閻魔まいり　旧暦の七月十六日。

日航機事故八・一二連絡会、群馬県上野村御巣鷹の尾根、二六〇人死亡。

上を向いて歩こう涙がこぼれないように　阪本九。

新盆や　ひそかに草の宿す露　　久保田万太郎

数(かず)ならぬ身とな思ひそ　玉祭(たままつり)　　芭　蕉

芭蕉の若い頃の内縁の妻であった尼寿貞(あまじゅてい)が身まかりけると聞きて、

芭蕉庵での生活を思い出しながら。尼寿貞の生涯は不遇だった。

自分のことをとるに足りない人間などと思わないでおくれ。

こうして初盆を迎えるあなたを悼(いた)んでいるよ。
静かに語りかける口調にも深いいたわりと哀しみがこもる。
すまない、許してくれと頭(こうべ)を垂れているように思われる。
玉祭は魂祭のこと。

父母の背を流せしごとく　墓洗う　新城　京所

なめらかな墓の背　素手で　洗ひけり　安部　桂

湖の行き所無き盆の波　辻　桃子

知る人の皆病んでおり盆の里　黒木　千草

生きている人に見せたく　墓参り　非　魔人

地蔵会や　線香燃ゆる　草の中　高浜　虚子

草抜いて　はや暮るる日の　墓参かな　河東碧悟桐

蜩（ひぐらし）や　山の施餓鬼（せがき）の日盛りに　北原　白秋

稲わらの　昔ながらの　門火かな　高橋　光男

もう会えぬ　夫（つま）へ手向けの　門火かな　上田　喜代

今一度　逢いたき人よ　門火たく　岩佐よしえ

犬のこぶ　目立ってきたり　大文字　辻　水音

大文字（奈良十五日、京都十六日）。万灯会燈篭。

大文字を見ると、亡くなられた人のことが偲ばれます。
二〇〇七年はユング心理学者河合隼雄先生のことが特に残念に思われます。
千灯供養　八月二十三日頃　京都嵯峨化野念仏寺、奈良元興寺。

へご鉢に　大文字の火うつりけり　高浜　虚子

万灯籠　離れて一つ　闇の奥　安部　桂

精霊火　抱いてゆく闇動くなり　火箱　遊歩

送り火を燈していたり　母一人　遠藤　蘭

送り火の　うしろの闇を怖れけり　茨木　和生

落ち蝉の　また　ひとふるへ　いたしけり　　安部　元気

処暑八月二十二日二十三日。
夜長、燈火親し。
日永――春。　短夜――夏。　短日――冬。

ふとわれの死骸に蛆（うじ）のたかる見ゆ　　野見山朱鳥

寝る男　唄う女に　残暑かな　　大谷　朱門

声かれて　補欠選手の　夏終わる　　黛　まどか

全国高校生野球大会

切れそうで切れぬ電話や　秋の雨　　村田　休亭

秋の虹　下車する駅を忘れけり　　森本　茉衣

水の秋　鯉も芥も川底に　加藤　晃規

東塔の見ゆるかぎりの秋野行く　佐々木不羅

暁の雲おさまらず　秋近し　佐藤　紅緑

初秋（はつあき）や　海も　青田（あおた）の一（ひと）みどり　芭　蕉

名古屋鳴海眺望

次の間に　髪　梳いている　稲光　黛　まどか

半分に切られしみみず　きゅうと鳴く　越渡あざみ

竿（さお）に来て　釣れてますかと　赤トンボ　今井　金治

赤トンボ　平和な顔の認知症　石川　繁乃

蜻蛉や　杭を離るること　二寸　夏目　漱石

山道をゆきつもどりつ　あきつかな　室生　犀星

蝉で起き　コオロギで寝る　いい季節　海野　定雄

ひぐらしや　暮るるを嘆く　木々の幹　日野　草城

かなかなの　かなかなと鳴く　夕べかな　清崎　敏郎

一振りのあと　鈴虫の　しぐれ鳴き　石原　八束

漂うを生業（なりわい）として夏鴫（かもめ）　しみず屯児

錦鯉　飼われて人の指を吸う　辻　桃子

飛び出して草より青し　子かまきり　鋼　つよし

初鮎のあきれるほどの塩厚き　おがわ周子

新涼や　尾にも塩ふる　焼肴　鈴木真砂女

一人居に弁当配り茄子の花　伊藤なづな

桐一葉　日当たりながら　落ちにけり　高浜　虚子

桐一葉落ちて天下の秋を知る——淮南子

桐一葉　吹かるるままに　散るままに　丹生　幸美

葉桜の今は静かにしだれたる　小林　菜月

杉落ち葉ひよどり坂を埋め尽くし　長沢　常良

直角に直角に散り　散り松葉　田村　三合

松手入れする声落ちる枝落ちる　辻田　克己

花木槿（むくげ）　裸童（はだかわらべ）のかざし哉　芭　蕉

白槿　芯まで白し加賀女　沢木　欣一

気詰まりな話は後に　西瓜食ふ　山本　哲哉

痛いほど　子供の視線　西瓜切る　吉田　哲弥

西瓜　食(は)む　阿修羅の後の恵比須顔　野澤　正彦

朝顔や　一輪深き　淵(ふち)の色　蕪　村

朝顔は酒盛知らぬ　盛り哉(かな)　芭　蕉

鼓子花(ひるがほ)の短夜眠(みじかよねぶ)る　昼間哉　芭蕉

夕顔や酔うて顔出す窓の穴　芭蕉

晩酌のほろ酔い機嫌に浮かれ、芭蕉庵の暗い穴から首を出す仕種で
小窓からひょいと顔を出すと、垣の夕顔がほの白く咲き出ている。

朝顔に釣瓶取られて貰い水　千　代　女

朝顔に喪服の人の屈むかな　瀧井　孝作

草の戸に我は蓼食(たで)ふ蛍かな　其　角

蓼食ふ虫も好き好き　を踏まえている

朝顔に我は飯(めし)食ふ男かな　芭　蕉

草の戸に我は蓼食ふ蛍かな（其角）の風変わりな生活志向奇人ぶりに対して、
自分は平凡な普通の暮らしを志向しているとして、

紫のふっとふくらむ桔梗かな　正岡　子規

ことごとく露草咲きて　狐雨　飯田　蛇笏

捨て水の　どっと露草押し倒す　広瀬　翔

露草も露の力の花開く　　飯田　龍太

鳳仙花　はじきて守り抜く秘密　　片山由美子

白というはじめの色や　酔芙蓉　　鷹羽　狩行

紅芙蓉　今日も水やり今日も咲く　　栢野　木樵

酔芙蓉　気分はいつも流れ雲　　森　茉明

海恋の晶子の歌碑や　カンナ燃ゆ　　安部　桂

九月

あれだけの蝉の命のどこに消え　　門田　浩

笠脱ぎて　少女に戻る　風の盆　　安里　道子

越中おわら風の盆　九月一日から三日間

防災が　防衛の日になる気配　　五社　蘭平

大正十二年九月一日　関東大震災。
二〇〇一・九・一一　米国同時多発テロ、ニューヨーク世界貿易センター。
今は米国がテロにおびえている。

台風の来そうな風の匂いして　　奥村　里

二百十日　九月一日ごろ、

立春から数えて二百十日目の日。稲の開花時期。
大型台風が日本に上陸する頃　ジェーン台風（S25年）

芭蕉野分(ばしょうのわき)して　盥(たらい)に雨を聞く夜哉(よかな)　芭　蕉

芭蕉の葉がはげしく雨にもまれて音をたてる野分の夜。
独り、雨漏りを受ける盥の音に耳を傾けている。

鶏頭の　皆　倒れたる　野分(のわき)かな　正岡　子規

野分(のわき)――野の草を吹き分ける。秋吹く強く荒れる風、特に台風。

窓すべて開けよ　今年の秋の風　唐澤　春城

不知火の燃ゆらむ　有明海眠れず　村瀬さつき

不知火―干潟の漁火が原因で起こる蜃気楼のような現象。
九州八代海、有明海

秋めくや　軽き寝息の三様に　加藤　良彦

霧雨や　山を見あぐる　山の茶屋　佐藤　紅緑

月天心　貧しき町を　通りけり　蕪　村

月

上り月

新月――初月――二日月――三日月（眉月、眉書月）

――弓張月（半月、上弦の月、上の弓張）――待宵（小望月）

満月　中秋の満月を名月という。　望月、望の月。十五夜。観月、月見。月夜。

無月（十五夜）。　雨月、月の雨。宵闇。夕闇。

星月夜。　月の兎、玉兎、玄兎、銀兎、

月の都、月の剣、月の船、月の盃。月の氷、月の霜。

下り月（望下り）

――十六夜――立待月（十七夜）――居待月（十八夜）

――臥待月（寝待月）――更待月――弓張月（半月、下弦の月、下の弓張）――新月

月光は　凍りて宙に留（とど）まれり　　山田健二郎

名月や　池をめぐりて　夜もすがら　　芭蕉

この池は芭蕉庵の傍らの池。

十五夜の寝乱れているわたしかな　　山田　蓑虫

ひさびさに月の兎を見ておりぬ　　安部　元気

三日月の時は休んでいる兎　　馬場　なお

ちゃぶ台の下に猫いる　月見かな　佐々木玲炎

ダリの時計となる　月光の水溜り　白澤　良子
ぐにゃりと曲がった水溜りの映像

無月にて　早めに浸る　湯をぬるく　赤川　楓

月の座の一人は　墨をすりにけり　中村草田男
月の座――月の宴

松島の雨月や　会ふも　別るるも　佐藤　鬼房
雨月――無月

一家（ひとつや）に　遊女（ゆうじょ）も寝たり　萩（はぎ）と月　芭　蕉

遊女たちが、芭蕉と曽良を僧侶だと思って、旅の安全のため同行を願った。
新潟市振（いちぶり）の宿で。
萩――遊女。　月――芭蕉、風雅。
出家姿の自分と同じ宿に、一間（ひとま）隔てて、
はからずもはなやかな遊女が泊り合せて寝ている。
折から田舎宿の庭の萩の花に、冴（さ）えた秋の月が照るのにも似て。

嵐吹く　草の中より　けふの月　　樗良

中々（なかなか）に　ひとりあればぞ　月を友　　蕪村

なまじっか誰かといるより、かえって独りがよい。
独りでいるからこそ、こうして月を唯一の友としてすごしていられるのだ。

悔恨も男も捨てて　無月（むげつ）かな　　時実　新子

名月や北国日和定めなき　芭蕉

北国―北陸地域

陰暦八月十四日の夕暮れ、敦賀の津に宿を求む。

その夜、月ことに晴れたり。

「あすの夜もかくあるべきにや」と問えば、

「越後の習ひ、なほ明夜の陰晴計りがたし」

と、あるじに酒をすすめられて、気比の明神に夜参す。

せっかくの陰暦八月十五日の名月なのに、雨だなんて。

本当に北陸地域の天候は定まらないものだ。

三井寺の門敲かばや今日の月　芭蕉

謡曲の「三井寺」を踏まえている。また、

僧は敲く月下の門――唐詩紀事を意識している。

鎖明(じょうあ)けて月さしいれよ浮御堂(うきみどう)　芭蕉

この句は大津市堅田の浮御堂（臨済宗の仏堂、満月寺）で詠まれた。

鎖――鍵

浮御堂の連想で言えば、

奈良市内にも浮御堂があり、観光スポットである。

初恋のあとの長生き　春満月　池田　澄子

生き抜いて　年寄りの日にかく集う　山畑　禄郎

敬老の日　九月十五日

この秋は何(なん)で年寄(としよ)る雲に鳥　芭蕉

今年の秋はなんでこんなに年老いたと感ずるのだろうか。

今、鳥が雲のかなたへ飛び去ってゆこうとしている。

旧暦九月二十六日、大阪の料亭浮瀬(うかむせ)で。

「雲に鳥」で漂泊の生涯と、衰老の寂しさと、さらには孤独の思いとを見事に象徴した。

木曽路行きて　いざとしよらん　秋ひとり　蕪村
行く秋や　身に引きまとふ三布蒲団（みのぶとん）　芭蕉
今日ばかり人も年寄れ　初時雨（はつしぐれ）　芭蕉

時雨の寂しさは枯淡の境地に達した老いの心にふさわしい。

じんとくる手紙をくれた　ろくでなし　時実　新子
酢につけて　生姜（しょうが）　紅さす　夕時雨　鈴木真砂女
朝霧や　約束事は破られる　天根　夢草

霧、水蒸気が多く空気が冷却する。（春は霞、秋は霧。）

白露（しらつゆ）や　茨（いばら）の刺（はり）に　ひとつづつ　　蕪村

露の玉が野茨の刺の先にひとつずつとどまって朝日にきらめいている。

秋燈を明（あこ）うせよ　秋燈を明うせよ　　星野　立子

秋夕焼け　旅愁をいはむには　淡し　　富安　風生

夕焼けは夏

秋の暮れ　山脈　いづこへか帰る　　山口　誓子

もの言へば　唇寒し　秋の風　　芭蕉

人はよく言わでものことを口にして
あとでうそ寒い秋風で唇をなでられたような
ぞっとした思いにおそわれることがある。

唇亡びて歯寒し　　春秋左伝

を踏まえた

酒の席では失言多し。失敗多し。酒席の無難な話題を模索するのも年のせいかわずらわしくなった。

一人で自己の命をじっとかみしめながら飲むことを楽しみにしている。

人の短を言ふ事なかれ、己が長を説く事なかれ、文選。

関連して一言。

話をしていて感覚が全く溶けあわない人がいます。

一人より二人の方が淋しいときもある。

ものひとつ　我(わ)が世(よ)は　軽き瓢哉(ひさごかな)　　芭蕉

乏しい草庵の中で調度めいた物といえば、門人北鯤(ほっこん)から贈られ、米びつとして使っている瓢(ひさご)が一つあるばかり。

山口素堂が、この瓢(ひさご)に「四山(しざん)」と命名した。

たいしたものも持たぬ、わが境涯のちっぽけな軽さは、その軽々としたひょうたんにまことによく似ている。

清貧と自足の境地に安んずる心境。

藁砧（わらきぬた）土間に静かな闇来たり　日野たんぽぽ

俵編（たわらあみ）大いなる手の一家族　水越　創泉

ついと出づ　うしろすがたの秋遍路　阿波野青畝

喪主といふ妻の終の座　秋袷（あきあわせ）　岡本　眸

暁（あかつき）の冷ややかな雲　流れけり　正岡　子規

水底は流れておらず水澄めり　広瀬　翔

秋高し　空より青き　南部富士　山口　青邨

秋分の日九月二十二日二十三日頃。

秋意、爽涼、爽やか、暑熱去って爽快な感じ、冷ややか、水澄む。

野分、青北風（あおぎた）、高西風（たかにし）、台風（九月上旬～十月中旬）

風の盆。秋彼岸　秋分の日を中日とした七日間。蛇穴に入る、曼珠沙華。

田の神は、春社に田へ下り種をおろし、秋社に収穫を終え山に上る。

向こうでも　綺麗でいなよ　秋彼岸　　加藤　郁乎

砂踏めば砂の声とも秋の声　　妹尾　芳江

秋雨や　灯影（ほかげ）に添うて町あるく　　池内たけし

頬杖に深き秋思の観世音　　高橋淡路女

春は曙、秋は夕暮れ。

弓矢八播　蘆焼く烟に　むせたもう　西野　文代

秋旱　置物のごと　爺ひとり　小山　佳栄

おかっぱの前髪割れて風の秋　柚木ひさを

この谷を　一人守れる　案山子（かかし）かな　高浜　虚子

それがしは　案山子にて候　雀どの　夏目　漱石

へのへのと　横目でにらむ　案山子かな　和田　誠

モジリアニの女の顔の案山子かな　阿波野青畝

水落ちて　細脛（はぎ）高き　かがしかな　蕪　村

稲田渡る　大きな風に吹かれおり　　紅　幸子

しずかなる力満ちゆき　ばったとぶ　　加藤　楸邨

淋しさに又銅鑼打つや鹿火屋守（かびやもり）　　原　石鼎

鹿垣（ししがき）や　村の向こうは大江山　　丸雅　建

早稲の香や　強き日差しに頬焼きて　　せきみのる

水落とす　皆どたばたと結婚す　　梶川みのり

四方から攻め入るように稲を刈る　　あべふみ江

稲刈って　だんだんひろきうしろかな　松尾　睦月

刈り跡の薄（すすき）にすがるいなごかな　廖　太

終戦直後はいなごを焼き、よもぎ入りおかゆを食べましたね。
それでも子供はみんな笑顔でした。
学人は貧なるべしと言われるが、子供の教育には飢えの思いが必要と
いうことでしょうか

両の手に拾い溜めたる落穂かな　村上　鬼城

秋祭り　太鼓の棒を励ましぬ　井手口俊子

秋祭――収穫祭

秋祭り　少女　メッキの指輪買う　五所平之助

時代祭り　牛馬も人も疲れたる　森本　茉衣

鞍馬祭り　草履捨てある大根畑　渡辺　夏紀

桃青し　赤きところの少しあり　高橋　素十

赤飯に胡麻塩たんと秋の山　辻　桃子

山澄む――秋は大気が澄んで山が明るく見える。
山粧う――山が紅葉に彩られてひときわ美しい錦の山。

遠山が　目玉に映る　とんぼかな　一　茶

秋潮に　もてあそばれし　小石かな　大野　朱香

東京の土　掘り返す　夜業かな　坂本　光世

ダンスシューズ　丸めてしまひ　夜学の子　花輪　陽酔

灯の下に　一人一人の　夜食かな　鈴木　不意

甲高き百舌鳥の縄張り　垣根まで　相原　宗作

碧落に見えて　鶫（つぐみ）の群れなるべし　岡本　圭岳

鳥　秋は色彩、色鳥。春は囀り。

渡り鳥

秋に北方から渡ってくる冬鳥―雁、鴨、鶫、鶸、あとり。

秋に南方へ帰っていく夏鳥―鴫、千鳥。

燕帰る。

きつつきの死ねとてたたく柱かな　一　茶

けふからは　日本の雁ぞ　楽に寝よ　　一　茶

雁渡来、雁列、雁行、雁の竿。

さりげなき　保身のことば　草ひばり　　平山　道子

虫籠を置いて無口の一家かな　　岡田　龍

ふるさとの遅き夕餉に虫時雨　　丸山　長恵

虫の声　キリギリス，馬追い、くつわむし、こおろぎ、鈴虫、松虫

鉦叩き、邯鄲、草雲雀、蓑虫、蚯蚓(けら)鳴く。

きりぎりす　青き体の鳴き軋る　　野沢　節子

蟷螂の翔びて　怒りをおさめけり　　加藤　けい

はららごを抜かれし鮭が口を開け　清崎　敏郎

秋鯖、秋刀魚（さんま）、太刀魚（たちうお）、鮭上る、鰯（いわし）。

烏賊干して雫垂るるや　秋の浜　大橋ごろう

さわやかに　おのが濁りを抜けし鯉　皆吉　爽雨

ゆっくりと煮て　くったりと秋の茄子　市川　七菜

梨　剥くや　甘き雫の刃を垂るる　正岡　子規

レモン切るより　香ばしりて　病よし　柴田白葉女

柿を置き　日々静物をなす思念　川端　茅舎

葡萄垂れ下がる如くに教えたし　平畑　静塔

口あきて　あけびは泣けり　霧の中　殿村　菟絲子

京といえば　嵯峨と思ほゆ　竹の春　角田　竹冷

竹の春、竹刈る――秋。　竹植える――夏。
伐採好期――竹は、陰暦八月に。樹木は、陰暦六月に。

濡れ縁に影を落として竹の春　富樫　風花

秋耕の土　ふんわりと　こんもりと　市川　薹子

見まわせば　もう夕方や　種を採る　川口　未来

雲飛んで　みるみる花野　ひろがりぬ　井出はじめ

青空の　見えて　雨降る　花野かな　大峯あきら

余生とは　薬をのむこと　鰯雲　大牧　広

木(こ)の実降る石に座れば雲去来　杉田　久女

蜻蛉(とんぼう)や取(と)りつきかねし草の上　芭　蕉

蜻蛉の動きを細かく観察した純客観風の描写

秋の野風にそよぐ草の葉末に、蜻蛉がとまろうとして、

接近しては飛び退き、退(の)いては接近し、なんべんも同じ試みをくりかえした

あげく、ついに取りつきかねたか、ふいと遠くへ飛び去る。

月満ちて　夜の芙蓉の　すわりけり　暁　台

白露をこぼさぬ萩（はぎ）のうねりかな　芭蕉

秋の七草
――萩（はぎ）、尾花（すすき）、葛（くず）の花、撫子（なでしこ）、女郎花（おみなえし）、藤袴（ふじばかま）、桔梗（ききょう）。
秋アザミ、露草、コスモス、風船かずら、へちま、ほほづき、
オシロイバナ、カンナ、芭蕉、かぼちゃ、
貝割菜、胡麻、桃、梨、唐辛子、秋茄子。

独房に林檎と寝たる誕生日　秋元不死男

曼珠沙華　浄土の雲に　紅移す　平畑　静塔

曼珠沙華　赤衣の僧のすくと立つ　角川　源義

曼珠沙華　同じ高さで　縺れ咲く　阿部　桂

まんじゅしゃげ　昔　おいらん　泣きました　渡辺　白泉

われの名に　奈落の奈の字　曼珠沙華　辻　美奈子

鬼灯（ほおづき）を地にちかぢかと提げ帰る　山口　誓子

コスモスを離れし蝶に　渓谷（たに）深し　水原秋櫻子

をとといの糸瓜（へちま）の水も取らざりき　正岡　子規

一隅は秋明菊の明るさに　尾野　秋奈

乱暴に野菊を摘んで未婚なり　秋元不死男

リンドウは　若き日の　わが挫折　田川飛旅子

雑踏に山竜胆を捧げ持つ　吉川　茗荷

山に蘭　渓に石　得て　戻りけり　青木　月斗

女郎花（おみなえし）どこまでゆけど墓の径　尾野　秋奈

野牡丹の咲く病院の中歩く　難波　慶子

猫除けに　家の周りの富士薊　荒井　八雪

大ひねり小ひねり風の芒原　福田　大志

金色に暮れゆく海や　花すすき　小島　健

山は暮れて　野は黄昏の　薄かな　　蕪村

浪の間や小貝にまじる萩の塵　　芭蕉

汐染むる　ますほ（赤い色）の小貝拾ふとて　色の浜とは
いふにやあらむ（西行）を踏まえている。
敦賀市西岸　色の浜（種の浜）で。
萩の塵――萩の花びら

鶏頭や雁の来る時なほあかし　　芭蕉

葉鶏頭＝雁来紅――雁の来る頃には葉が鮮やかな紅色になる。

勧誘に　懐かし友の電話切る　　澤幸子

十月

この道や　行く人なしに　秋の暮　　芭蕉

晩秋の風景の中に漂う寂寥感（せきりょうかん）、叙景的発想の作と解されるが、芭蕉は「所思（しょし）」と題を置くことにより、厳しい芸術と人生の道における孤独と寂寥（せきりょう）を象徴した人生詠嘆的心境句の色彩を明確化させた。深く寂（さび）の境地に徹している。

この道には誰ひとり行き交う人もいない。さびしい秋の夕暮れどきである。

このあと十月十二日に芭蕉は亡くなった。

大阪の料亭浮瀬（うかむせ）で催した発句。

門を出れば　我も行く人　秋の暮　　蕪村

私も旅人のひとりとなる。

鰯雲　まっすぐ帰りたくない日　富樫　風花

塚も動け　わが泣く声は　秋の風　芭　蕉

秋燈下　片便りとは　知りながら　黛　まどか

菊月。晩秋、秋晴れ、秋うらら か、秋思、秋の声、秋澄む。
釣瓶落とし、秋寒む、肌寒、朝寒、夜寒、そぞろ寒、冷(すさ)まじ。

蛇穴に　ものはくぼみにたまるかな　戸田　九鈴

蛇　穴に入りて　雨雲　動きけり　棚山　波朗

朝粥と御法話賜り　蟻穴に　篠原　喜喜

新藁に　ふわりふわりと　寝楽かな　　一　茶

重陽の初栗飯が隣より　　中井　玲子

重陽の節句　陰暦九月九日　高きに登る。

栗飯の　あたたかく人を発(た)たせたり　　長谷川かな女

栗飯(くりめし)を　子が食ひ散らす　散らさせよ　　石川　桂郎

栗飯を登校拒否の子によそう　　渡辺　夏紀

震源地　秩父と報ず　きのこ飯　　大川　桃鬼

あてにせし金　ちょぼっとや　とろろ汁　　佐々木紫乃

ひとときの華やぎとせむ　菊膾（なます）　村越　化石

菊日和　大工に留守を頼みけり　井手口俊子

わが命　菊に向かいて　静かなる　水原秋櫻子

有るほどの菊　なげいれよ　棺の中　夏目　漱石

菊どきは　菊の香ばかり　仏の間　角川　照子

菊の香（か）や奈良には古き仏達（ほとけたち）　芭　蕉

九月九日、重陽の節句に。

伊勢物語初段では、奈良を舞台に在原業平（ありわらのなりひら）が恋の物語をくりひろげているが、それを踏まえている。

菊の香と古都の古仏との間に微妙に通い合う匂いを感合させ、

古雅な詩的世界を創り出した。

菊の香(か)にくらがり登る節句かな　　芭蕉

奈良～大阪の旧街道のほぼ中間、生駒山地にくらがり峠がある。

菊に出(で)て　奈良と難波(なには)は宵月夜(よひづきよ)　　芭蕉

菊薫る重陽の朝、古都奈良を出て、

大阪市南区高津(こうず)の洒堂(しゃどう)に着いた自分には、日もすでに暮れ、

空には九日の宵(よい)の半月が美しく光っていた。

ひざまずく　童女の髪や　菊供養　　水原秋桜子

帯を解かずに　衣を脱げり　菊人形　　安部　桂

骸骨や　是も美人の　なれの果て　　夏目　漱石

湯疲れの二度の朝湯や　龍田姫　辻　由美

紅葉散る　旅の衣の　背に肩に　五十嵐播水

障子閉めて　四方（よも）の紅葉を感じをり　星野　立子

蔦紅葉　巌の結界とざしけり　大野　林火

薄紅葉　水琴窟に　耳澄ます　安部　桂

一雨に濡れたる草の紅葉かな　日野　草城

阿武隈川　一瀑に果つ　渓紅葉　篠田悌二郎

粧ひし　山の片袖　初紅葉　高浜　虚子

半襟も蔦のもみぢや　窓の秋　永井　荷風

蔦は、永井荷風の友人市川左団次の家紋。
芸妓は、好きな男の紋を羽織や下着につけて、心意気を示した。

この樹登らば　鬼女となるべし　夕紅葉　三橋　鷹女

黄落の　つづくかぎりの　街景色　飯田　蛇笏

末枯（うらが）れの若草山となりにけり　正岡　子規

落花生　食ひつつ　読むや　罪と罰　高浜　虚子

蛤に残る雀の頃の舌　伊藤　白潮

雀　蛤となる　十月十三～十七日　七二候の一

蛤（はまぐり）のふたみに別れ行く秋ぞ　　芭蕉

ふたみに別れゆく　掛詞

①貝を蓋と身のふたつに引きはがす

②二見（ふたみ）に向けて旅立つ

岐阜県大垣市で門人たちに見送られて。

大垣から川舟で「二見（ふたみ）」に向けて旅立つにあたり伊勢の名産蛤を踏まえ、

「蛤の蓋（ふた）と身に別れ」から送りにきてくれた門人衆と「別れ行く」

「行く秋」と引き出した重層的表現。

修学旅行で夫婦岩を背景に写真をとった。

「柳龍天子（りゅうりゅうてんし）」と落書きをしたあの人はどうしているだろう。

朝寒（あさざむ）のひざに日当たる電車かな　　柴田　宵曲

朝寒や　歯磨き匂ふ　妻の口　　日野　草城

遅く着いて　悪き宿とる　夜寒かな　　佐藤　肋骨

病雁（びょうがん）の夜寒（よさむ）に落ちて旅寝哉（かな）　　芭　蕉

大津市琵琶湖西岸堅田の浮御堂の風景は堅田（かただ）の落雁（らくがん）といわれ、浮世絵師歌川広重も描いている。

堅田の夜空を渡る雁の列から、一羽だけ急に舞い落ちたあの雁は、夜寒に堪えきれなかった病気の雁なのか。

芭蕉は風邪を引き堅田蜑（あま）の苫屋（とまや）にて病んでいた。

私もあの雁のように思わぬところで寝込んでしまったものだ。

生きてさえいれば、きっと明日がある。

どんな状況にあっても、自ら命を絶ってはいけない。

あなたの、私の命は、仏の御命である。

死にもせぬ旅寝の果てよ秋の暮　芭蕉

枯枝（かれえだ）に　烏（からす）のとまりけり　秋の暮　芭蕉

「寒鴉枯木（かんあこぼく）」を意識した句。

秋の暮れ　大魚の骨を海が引く　西東　三鬼

去年より　又　さびしいぞ　秋の暮　蕪村

行く秋の耳かたむけて音はなし　高木　晴子

ゆく秋や　ふくみて　水の　やはらかき　石橋　秀野

野ざらしを心に風のしむ身哉（かな）　芭蕉

「野ざらし」は風雨にさらされ白骨化した髑髏（されこうべ）をいう。

路粮を包まず、三更月下無何（むか）に入る。

荘子の「無何有之郷（むかうのさと）」は、一切の執着を離れきっており、芭蕉の願いに通ずるものがあった。

野ざらし紀行の旅に出発。隅田川のほとりのあばら屋をあとにすると、風の音がそぞろ寒く聞こえる。行き倒れ、風雨にさらされた自己の野ざらしを思い浮かべる。その野ざらしを心に刻みこんで、歩きはじめれば、吹く風がなおさら身にしみて冷たく感じられる。

下山コース　釣瓶落としの長丁場　　柳田　風琴

露天湯に　たっぷりつかり　秋惜しむ　　山田なつめ

冬近し　けもののようなあくびして　　北沢かおり

流れんと　身を細うして露の玉　　佐々木蒼猫

水ピシッと　打ちこみたるや　障子貼る　西野風鈴人

髑髏めく　ハローウインの捨て南瓜　湯浅　洋子

動くもの　なにもおらざる　水澄めり　右城　暮石

たっぷりと注ぎ　ゆっくり温(ぬく)め酒　しの　緋路

恐るべき妻の記憶や　夜の秋　三方　元

淋しさを　知りあっていて　他人なり　前田　雀郎

慰めず　慰められず　ひとり居る　藤村　青明

いつからか　花が私を愛しはじめる　森下　彭子

哀しみはこれだと思う　白い花　浅野　良雄

もう愛してはいない気がして　しゃがむ　清水　洋子

男を追いかけて、ふりきられて道にしゃがみこむ。
絶望したときは涙も出ない。

これほどの愛が　別れの日に目覚める　羽渕　礼子

別れたときに愛の姿があらわになる。

心・愛・夢　夕焼けに脳血栓　大杉ミツ子

んの字に　膝抱く　秋の女かな　小沢　信夫

イエスより　マリアは若し　草の絮（わた）　大木あまり

秋深き　隣は何をする人ぞ　芭蕉

今、旅の身を病の床に臥している。隣の家の住人は何をして暮らしている人なのか。物音ひとつしない。そんなことにも秋の深まったことを感じる。互いに隣り合せて住みつつ係わり合うこともない人生の孤独と、顔も名も知らぬ隣人にすら人懐かしさを覚える心情とを交錯させ、晩秋の深い寂しさの底で、人間存在そのものの寂しさを表現した。「秋深き」で半ば切り、含蓄を込める俳句的技法。「何をする人ぞ」は詠嘆詞。起きて吟じた最後の作品。

こちら向け　我もさびしき秋の暮　芭蕉

壁隣（かべどなり）　物ごとつかす　蕪村

夜寒（よさむ）かな

隣の家では、なにやら物をゴトゴト動かして音をさせている。

我を厭(いと)ふ隣家　寒夜　鍋を鳴らす　　蕪村

隣家はなにか温かいものを食べているようだ。

うき人に　手を打たれたる　砧(きぬた)かな　　蕪村

うき人――つれない恋人

砧――布の艶を出したり柔らかくするために、木槌で布を打つ。

その木や石の台。

碇(きぬた)打ちて我に聞かせよ　坊が妻　　芭蕉

西行上人隠棲(いんせい)の草庵、西行庵室を訪ねる。

み吉野の山の秋風小夜(さよ)ふけて古里(ふるさと)寒く衣打(ころもう)つなり

宿坊の妻よ、その昔を偲(しの)ぶよすがに、

どうか碇(きぬた)（砧(きぬた)）を打って聞かせてほしい。

西行(さいぎょう)の庵(いほり)もあらん　花(はな)の庭(にわ)　　芭蕉

鮎落ちて　いよいよ高き　尾上かな　蕪　村

古酒といい　新酒といいて　はしごかな　田中　迪子

昼の酒場窓に風船かづら揺れ　浜名ちどり

この村の　固く大きな新豆腐　松尾むかご

はららごの赤暗かりき雪の宿　辻　桃子

どんぐりの　寝ん寝んころり　ころりかな　一　茶

小鳥来る　音うれしさよ　板庇（いたびさし）　蕪　村

鳥

秋には夏鳥が南方へ帰る。

燕　三月渡来
ほととぎす　六月渡来

秋には冬鳥が北方へ帰る。

雁　九月渡来
鴨　十月渡来
つぐみ　十月渡来

秋には留鳥が繁殖地から低地に移動する。

びいと啼(な)く尻声(しりごえ)悲し夜(よる)の鹿(しか)　芭蕉

この句は奈良猿沢の池を午前零時頃吟行して詠んだ。
尻声――発情期の高く大きな悲しげなビーッという鳴き声があとを引くさまをいう。肉声を擬音で捉(とら)えた点に俳諧としての新しみと強みがある。

尻声に関連して一言。
春日山を朝早く歩いていて鹿の尻声を聞く。

突然啼く声に驚き、しばし立ちどまり汗をぬぐう。
川のせせらぎの音に負けじと、秋の虫たちのコーラスがまたはじまり
原始林にこだまして落ちていく。

鹿寒し　角も　身に添ふ　枯れ木かな　蕪　村

神鹿の息はづませて角切らる　辻　由美

梨食うて　すっぱき芯に至りけり　辻　桃子

柿の木にまたがりながら柿を食う　堀　由布

深酒の悔いを　ひとまず柿食えり　小島　健

種のある　昔ながらの葡萄かな　竹南寺摩耶

葡萄食ふ　一語一語の如くにて　中村草田男

栗剥くに　完全無欠目指しおり　石井　みや

夜の雨に　くるみの落ちる音しきり　畑　みどり

ぎんなんの翡翠の童子生まれける　川村　鈴蘭

軍手置きある　いちじくの木の股ぞ　湯浅　洋子

無花果（いちじく）の割るというには　やはらかき　川崎　展宏

外出する妻楽しげや　実山椒　安藤　哲也

この石榴（ざくろ）口とがらせて　まだ割れず　加藤三七子

石榴　火のごとく割れゆく　過ぎし日も　加藤　楸邨

玉の歯を見せて笑える　石榴かな　青木　月斗

手に乗せて火種の如し　一位の実　飴山　実

クコの実をはみて小鳥となる思い　鍵和田柚子

アケビの実　餅なり　種の有る餅なり　山口　誓子

林檎（りんご）咬む歯に　青春をかがやかす　西島　麦南

月の出に　かりんは重く　匂ひけり　小島　健

籠り居て木の実草の実拾はばや　芭蕉

金木犀　こぼれて井戸の汲み水に　佐保田乃布

うつくしや　あら美しや　毒きのこ　一茶

おしろいが咲いて　子供が育つ路地　菖蒲　あや

郵便夫　白粉花の峡下り行く　境野　大波

触れもせで　濃き色しみる　（紫）式部の実　宮崎　桂子

妻の手にのせて　紫式部の実　小島　健

ななかまど　散るをこらへて　真っ赤なり　　林　徹

十一月

冬近し　時雨の雲も　ここよりぞ　　蕪　村

冬に入る月。文化の日十一月三日。

狂わねば　恋とはいわず　寒牡丹　　西嶋あさ子

恋は自傷行為である。いや自分も相手もまわりも傷つける。

（参照　倉田百三「愛と認識との出発」）

会えないことに心のかわきを覚えるようでないと恋ではない。

「いい人ね」といわれたら恋は終わっている。

危ない人と感じられる方が恋には親しい。

カアル・ブッセの詩を思い出す。

山のあなたの空遠く「幸(さいはひ)」住むと人のいふ。
ああ、われひとと尋(と)めゆきて涙さしぐみかへりきぬ。
山のあなたになほ遠く「幸(さいはひ)」住むと人のいふ。

カール・ブッセ　上田敏

逢いたさの　つのりて　銀河　凍(い)つるかな

蘭草　慶子

この句から思い出した。
紅のはつ花染の色深く、おもひし心われ忘れめや。
君来ずばねやへも入らじ、濃紫(こむらさき)、わがもとゆひに霜はおくとも。

多くの魅力ある人と交流することが人生を豊かにする。
自らが、経済的にまた生活的に自立して、上品さ、魅力、迫力を培いながら、一日一日を懸命に心豊かに生活しておれば、自然と赤い糸の相手も見つかる。
あたたかい言葉で、「ごめんね」と「ありがとう」を大切に。

失恋したら念を切っていくことである。念を継いでいってはいけない。
失恋するごとに心のひだは深くなる。

冬

立冬十一月七日頃

初冬、秋のなごりと冬の初めが交錯している。

小春日和、小春　↓　冬暖か、冬ぬくし　↓　冬日和、冬晴れ

初時雨、時雨――初冬のころ，降ってはすぐあがる雨。

初時雨（はつしぐれ）　猿も　小蓑（こみの）をほしげなり　芭　蕉

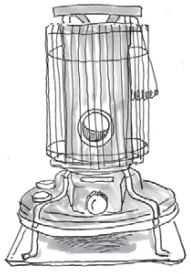
俳諧集「猿蓑」の巻頭の一句。

当時の俳壇に「軽み」と呼ばれる新風を吹き込んだ。

初時雨の伝統的美観の中で、

猿のペーソスとユーモアを交響させた俳諧的新境地。

食堂に　雀鳴くなり　夕時雨　　支　考



一粒の　音にはじまる　時雨かな　伊藤　柏翠

さびしさは　星を残せる　時雨かな　飛鳥田孍無公

みのむしの　得たり　かしこし　初時雨　蕪　村

蓑虫（みのむし）はいつも蓑を着ている。

煙草消す男に　帰心　小夜時雨（さよしぐれ）　谷口　桂子

世にふるも　さらに時雨の宿りかな　宗　祇

この世に生きていくのも、
こうして時雨に降られて雨宿りしているようなものだ。

ひとり行き　ふたり　あぜ行く　小春かな　水原秋桜子

冬晴れや　土鈴は　個々の音をもち　瓜生　和子

度忘れの　人の名　浮かぶ　冬うらら　安部　桂

玉の如き　小春日和を　授かりし　松本たかし

木の葉髪　指の先より　夢逃げる　奥野　久之

落ち葉して　木々りんりんと　新しや　西東　三鬼

落葉して　にわかに硬き　木肌かな　富樫　風花

女と　落ち葉踏み行く　ここで笑はねば　堀井春一郎

笑ってごまかす以外に無い大変な状況でしょうか。

蔦枯れて　もう枯れるものなにもなし　福田　大志

蔦（つた）蓬（よもぎ）蔓（かずら）葎（むぐら）と　枯れはてぬ

海に出て　木枯（こがらし）　帰るところなし　山口　誓子

木枯、北風、空っ風、北風、

こがらしや　苅田の畦の鉄気水（かなけみず）　惟　然

木枯に　岩吹きとがる杉間かな　芭　蕉

この句は愛知県鳳来寺で詠んだ句

鳳来寺山は杉の原生林に覆われ、山頂は鋭い岩が露出している。

杉の連想でいえば、私にとっては京都の北山杉であり、

川端康成の「古都」である。

北山杉は周山街道、高尾と小浜の途中の美山にある。

こがらしや　岩に裂け行く　水の声　　蕪　村

木枯らしが吹いている。
荒れ狂った波が岩にあたって裂ける音が聴こえる。

木枯らしや　目刺に残る　海の色　　芥川龍之介

柴の戸に　茶を木の葉掻く嵐哉　　芭　蕉

江戸から深川に隠棲。
長安は名誉や利得を重んずる土地なので、名もなく金もないものが生きていくのは難しい。（白楽天）を踏まえている。
落葉を熊手などでかき集めてそれで茶を沸かす。
木枯しの吹きすさぶ中、私は粗末な草庵に住み
そんなわびしい暮らしを送っている。
「茶を木の葉掻く」は、その葉を掻き集めて侘びしい草庵で

独り茶を煮てすすっている意と、
木枯らしの風が烈しく吹いて、落葉を庭の片隅に掻き寄せる意の両方をきかせている。
心の憂い時にこそ酒の尊さがわかり
貧乏してはじめてお金という神のありがたみに気づく　白楽天

居ることの音たてている　落葉掻（かき）　宮津　昭彦

寒山と拾得と寄る落葉掻　森川　許六

水底（みなそこ）の岩に落ちつく　木の葉かな　丈　草

鷹のつら　厳しく老いて　哀れなり　村上　鬼城

冬の鳥　樹海に高き　声　落とし　町　春草

港見え　金柑食みつ　坂下る　田中　柳水

あなたふと　茶を　だぶだぶ　の十夜かな　蕪　村

南無阿弥陀仏　だぶだぶ。　ああ、なんとありがたいこと。

浄土宗京都真正極楽寺十夜念仏法要にて。

雪囲い　ほうれんそう　茎赤し　長沢　常良

山茶花（さざんか）の　ひとたび、凍てて　咲きし花　細身　綾子

茶の花の雨を含める白さかな　鈴鹿野風呂

柊の葉の間より　花こぼれ　高浜　虚子

みずからの光をたのみ　やつで咲く　　飯田　龍太

さびしさの　目の行く方や　つわの花　　蓼　　太

庭隅に　石蕗ひとつ　又ひとつ　　工藤　充泉

南天の実の　匂いたる　鬼門かな　　鍵谷泰一郎

南天の花は夏

花咲いて　おのれをてらす寒椿　　飯田　龍太

裏返へる音を起こして　朴(ほお)落ち葉　　西村　和子

ほの見えて　やがて暗がり抱かれている　　笹田かなえ

無口なり　残尿感のあるうちは　佐藤　幸子

老人と落ち葉が溜まる公民館　日原　輝子

やがて死に出逢う　初冬の雑木林　柴田　午朗

冬蜂の　死にどころなく歩きけり　村上　鬼城

あと何年生きるかなあと思う夜　赤崎　照義

来るものは来る　大根を抜いている　藤川　良子

かなしみよ　ふくろうに似た声で鳴け　柴田　午朗

十二月

布団着て寝たる姿や東山　　嵐　雪

大雪十二月七日　冬帝　夏―炎帝

嵐雪（らんせつ）と布団引き合い侘（わ）び寝（ね）かな　　蕪　村

老僧の　だよだよ話　ろう八会　　星野　立子

十二月八日

ろう八や　雪をいそげる　四方（よも）の嶺　　阿波野青畝

しばらくは　柚子湯に　父をつけておく　　しの　緋路

冬至（短日）十二月二十三日ころ、一陽来復、ゆず湯

冬・短日。　春・日永。　夏・短夜。　秋・夜長。
北半球では、秋の彼岸以後、日が短くなり、
冬至のとき、一年中で最も日が短い。
但し、日の出が一番遅いのは、一月十四日頃。

柚子湯出で　夫の遺影の前　通る　岡本　眸

旗のごと　なびく　冬日を　ふと見たり　高浜　虚子

大仏の冬日は　山に移りけり　星野　立子

日短かや　稼ぐに追いつく貧乏神　一　茶

昼に出る狐のごとく　老いしかな　今阪　潤一

寒き夜や　我が身を我が寝ずの番　　一　茶

鬼も嫌　菩薩も嫌と　なまこかな　　一　茶

枯るるとは　いのち蔵（かく）すということに　　山本　春樹

冬枯れも　のぼりて見れば　いろはに帆（ほ）　　市川団十郎

冬になって草木も枯れてしまったが、高台に登ってみれば、
色とりどりの舟の帆が見える。

御破算を重ねてここにいる私　　金子由美子

意地悪と助言　やっぱり紙一重　　時実　新子

履歴書書いて　激しいものがある　　楢崎　進行

忘年会　財布の代わりに呼ぶ上司　　職員　一同

色ざんげ　哀しいことを言いなさる　　寺尾百合子
　重たい恋は口に出せない。

薬石の　ばらばら飯や　雪安居　　本田　一杉
　安居――十二月十六日から三ヶ月

冬浜に老婆ちぢまりゆきて消ゆ　　西東　三鬼

霙るるや　子をかばひゆく　軒づたい　　星野　立子

枯れ桑に　氷雨の音の　関が原　　長谷川素逝

風吹けば　風を聞き居り　冬ごもり

管　裸馬

北風に　たちむかふ　身をほそめけり

木下　夕爾

冬ざれ、　北風、空風（からかぜ）、隙間風、

冬・北風　　夏・南風　　春・東風

から風の　吹き枯らしたる　水田かな

桃　隣

地下鉄を　出ずれば　比叡おろしかな

火箱　遊歩

枯れてゆくものにもありし　日の匂ひ

斉藤　英雄

子を捨つる藪さへなくて　枯れ野かな

蕪　村

子は棄つれども身を捨つる藪はなし。

目は機嫌　口は不機嫌　冬ごもり　久保田万太郎

濡れ縁の　さびしき　晴れや　敷松葉　長谷川春草

枯野より枯野へ　ひとの渡りけり　角川　春樹

あまりに　手冷たきことの　恥ずかしく　成瀬正とし

冷たし、息白し、霜枯れ、　秋――冷ややか

冷たしは、皮膚に感じる温度の低さ。

白き息　ゆたかに　朝の　言葉あり　西島　麦南

駆け寄って　抱きしめられて　息白し　北川　撫子

看護婦の　ポッケにひそむ　ひび薬　桐村日奈子

焼き芋を　包む新聞　あたたかし　小林　章江

未婚にて　ふっと冷たき　畳かな　正木ゆう子

しんしんと寒さがたのし　歩みゆく　星野　立子

その辺をひとまわりして　ただ寒し　高浜　虚子

それぞれにマフラー巻いて別れけり　小林　篤子

マフラーを　かけてもらって　別れけり　しの　緋路

足袋つぐや　ノラともならず　教師妻　杉田　久女

イプセンの人形の家の夫は弁護士、久女の夫は教師。

ルノアルの女に　毛糸編ませたし　　阿波野青畝

ルノアールの女のふくよかな触感、色合い。

恐ろしき　夢見し　布団　干しにけり　　広瀬　東華

着ぶくれて　よわい傾く　思ひかな　　村山　古郷

暖冬や　ふてぶてしきは　腰の肉　　須佐　薫子

瀧涸れて　一枚巌となりにけり　　大橋桜坡子

咳の人過ぎ　咳の人来たりけり　　山口　珊瑚

咳をしても　ひとり　　尾崎　放哉

水枕　ガバリと　寒い海がある　西東　三鬼

風邪ひいて　木星の重さだろうか　五島　高資

食べながら考える癖　冬ごもり　石田　郷子

寄せ鍋に　睦みて　忘る　過ぎしこと　鷲谷七采子

かす汁、鍋、蜜柑、大根焚、ねぎ、白菜、人参、蕪、
マグロ、アンコウ、ふぐ、くじら、ぶり、むつ、牡蠣、

おでん食ふ　短きタバコ　捨てもせず　吉田北舟子

鮟鱇の　骨まで凍てて　ぶちきらる　加藤　楸邨

塩鯛の歯ぐきも寒し魚の店　　芭蕉

声嗄れて猿の歯白し峰の月　　其角　を踏まえた句

芭蕉は「かるみ」を主張した。

「かるみ」は俗語と通俗の中に諸事の物にある情を呼び起こして、庶民詩を創造しようとするものである。

平凡な日常の卑近な生活相の中に、事実に根ざしを持つもの、実在的な実のあるものの中に詩材を求め、

ざんぐりと、軽くあっさりと、日常の俗語で荒びて表現する。

こうした豊かな写実句を「かるみ」「新しみ」と主張した。

冬ざれの街の魚屋に数匹の塩鯛が並んでいる。

その剥き出した歯ぐきが寒々と凄まじい。

牡蠣の酢に　和解の心　曇るなり　　石田　波郷

生きながら一つに氷るなまこ哉　　芭　蕉

湯豆腐の　をどり出(いで)たる　白さかな　加藤　晃規

湯豆腐や　男の嘆き　聞くことも　鈴木真砂女

湯豆腐や　いのちの果ての　うすあかり　久保田万太郎

かす汁の　人参の朱の　おぼろなる　石毛　夢遊

すきやきや　くろがねの鍋　にほひ立つ　加藤　晃規

葱(ねぎ)白く洗いあげたる寒さかな　芭　蕉

蕪(かぶら)白くなる甘くなる寒くなる　伊佐　利子

死に至る時間　蕪を煮る時間　　永島　靖子

蕪煮るや　古り(ふ)に古りたる　落し蓋　　草間　時彦

水鳥の　しずかに　己が身を流す　　柴田白葉女

揺れすぎて　寝(いね)もやらずよ　浮き寝鳥　　火箱　遊歩

凍鶴の　まえに　わたしも凍てており　　橋本　風里

鶴啼くや　我が身の声と思ふまで　　鍵和田柚子

丹頂のどこか気取っている歩み　　大橋　敦子

こほるこほると　白鳥の夜の声　　森　澄雄

これほどの　鴨の群れいて　静かなり　　安部　桂

さみしさのいま声出さば鴨のこえ　　岡本　眸

海暮れて　鴨の声　ほのかに白し　　芭　蕉

冬の海が寒々と暮れて、薄明の彼方に鳴く鴨の声がどこかほの白い感触を孕(はら)んで聞こえてくる。

談林末期の破調の流行にあわせて、中七・下五「ほのかに白し鴨の声」を倒置して曲折をつけた。五五七音の屈折した不安定な破調のリズムは、薄明の奥に鳴く鴨の声をほの白しと感ずる幻想的な感覚と微妙な調和を奏でている。

しかし芭蕉は、その後、定型へ復帰している。

山鳩よ　見れば　まわりに　雪が降る　　高屋　窓秋

ふくろう淋し　人のごとくに　つぶるとき　　原石　鼎

絶対に　動かぬ　冬の金魚かな　　田村　三合

雪の朝（あした）　独リ（ひとり）　干鮭（からざけ）を噛（か）み得（え）タリ　　芭　蕉

江戸の俳諧は点取俳諧でその個人別得点に応じて損得を争う興味によって支えられていた。点者である宗匠は、その加点料で生活を営むという仕組みである。宗匠の間で俳客を奪いあい、宗匠が俳客にこびることにもなる。誠の俳諧を志した芭蕉は、宗匠のあり方に倦（う）んでこれを放てきし江戸から離れた。

「乞食の翁」と自称した芭蕉は、杜詩に感情移入的な読み方をしていた。杜甫の詩に「侘（わび）」を感じていた。

雪の朝、わびしい独り住まいの朝飯のおかずに、貧しいながらも今朝は干鮭（からざけ）をかじることができた。金持ちは美味な肉を食べ、若者は志を胸に

野菜の根をかじって耐えしのんでいる。なのに自分はそのどちらでもない世捨て人である。

埋火（うづみび）や　わが隠れ家も　雪の中　蕪村

妹は風花　姉は雪あかり　皆川燈

湯帰りや　灯ともしころの　雪催ひ　永井荷風

下町で女と暮らしていた頃の永井荷風。小さな家だが、あたたかい炬燵が待っている。

雪の日の浴身　一指（し）一趾（し）愛し　橋本多佳子

雪を待つ上戸（じょうご）の顔や稲光　芭蕉

雪、雪見月、雪は冬の風趣である。

抱きしめて逢う夜は雪のつもりけり　泉　鏡花

雪はげし　抱かれて　息のつまりしこと　橋本多佳子

雪になる　小降りの雨や　暮れの鐘　永井　荷風

聞こえてくるのは、本願寺の鐘。

この句は、ポオル・ヴェルレエヌの次の詩を意識しているといわれている。

都に雨の降るごとく、わが心にも涙降る。

私は上田敏の「海潮音」を読み直してみて、むしろ次の詩ではないかと思う。

秋の日のヴィオロンのためいきの身にしみてひたぶるにうら悲し。
鐘のおとに胸ふたぎ色かへて涙ぐむ、過ぎし日のおもひでや。
げにわれはうらぶれてここかしこさだめなくとび散らふ落葉かな。

雪とけて　うれしさうなり　星の顔　一　茶

靴紐を結ぶまもなく　雪つぶて　　中村　汀女

雪嶺を点じ　山々眠りけり　　大野　林火

山眠る――枯れ果てて眠るように見える山。冬山惨憺として眠るがごとし。
春・山笑ふ　夏・山滴る　秋・山粧ふ　冬・山眠る

細雪（ささめゆき）　妻に言葉を待たれをり　　石田　波郷

何か難しい決断を妻から相談された場面

しはぶきの次の言葉を待ちにけり　　木下　夕爾

しはぶき――咳

相手の返事を固唾を呑んで待っているところ

冬海の　水中海女の　髪ひらく　　古屋　秀雄

枇杷の花　鳥も遊(すさ)めず日暮れたり　蕪村

遊めず――心にとめない。
枇杷の花は、清楚で目立たない。

竹馬の　青き　にほひを　子等知れる　中村草田男

畳(たた)めば　我が手のあとぞ　紙衾(かみぶすま)　河合　曾良

衾はふとんのこと。紙の外被、中は藁。

寒潮に　少女の赤き櫛沈む　秋元不死男

冬芽粒粒　水より空の流れいつ　野澤　節子

あらぬ噂も　田舎は厳し　山眠る　八幡城太郎

枯れ木らは　枯れし高さを　競いけり　成瀬桜桃子

凍滝が　ヴァイオリンの音　もらしけり　宗田　安正

斧入れて　香に驚くや　冬木立　蕪　村

葉を落としつくしたる木のやすらげる　加藤　鎮司

冬木、枯れ木、冬枯れ、霜枯れ、

あせるまじ　冬木を切れば　芯の紅　香西　照雄

教会と枯れ木　ペン画のごときかな　森田　峠

一筋の滝のこころや　枯れ木山　原　石鼎

山越ゆる　いつか　ひとりの　ススキ原　　水原秋櫻子

枯れすすき　夕日の色を　まとひをり　　阿部　桂

我も　死して　碑に　ほとりせむ　枯尾花　　蕪　村

枯れ尾花のそよぐ芭蕉翁の碑に

枯れアザミ　心頭の花　燃えにけり　　川端　茅舎

枯れ原に　径なし　何かなつかしき　　河内　静魚

見ておりし枯葉を　風のさらいたる　　高石　幸平

古寺の藤あさましき落ち葉かな　　蕪　村

葉が落ちてしまうと藤の木の曲がりくねった幹があらわになる。

あさましき――興ざめである。

磯千鳥　足を濡らして　遊びけり　　蕪村

水寒く　寝入りかねたる鴎（かもめ）かな　　芭蕉

芭蕉庵のある隅田川の水はあまりに冷たいので
なかなか眠れずにいる鴎である。
私もその鴎と同じようなもので、いつもは眠れずにいるのだが、
元起和尚から酒をいただいたので、この酒のおかげで
今夜はよく眠れそうだ。

俳諧も風雅を志向するとなると、和歌、連歌と区別できなくなる危険があった。温雅な正風体（しょうふうてい）を主張した芭蕉は、心にこっけいある文学へと昇華することによって俳諧の独自性を確保しようとした。

この句は、素材の通俗さという俳言はないが、
ほのぼのと心をやわらげる心のおかしみ、心の俳諧の一句である。

ごを焚(た)いて　手拭(てぬぐい)あぶる寒さかな　芭蕉

ご――松の落葉のこと。燃料に使う。（三河の方言）

埋(うづ)み火や　ついには煮(に)ゆる鍋の物(もの)　蕪村

割(わ)れぬべき年もありしを古火桶(ふるびおけ)　蕪村

暮れ市の裏の匂ひを歩きけり　綾部　仁喜

年の暮れ、年用意、年忘れ、年の市

ゆく年の瀬田を廻(まわ)るや　金飛脚(かねびきゃく)　蕪村

滋賀県大津瀬田川瀬田の大橋は、関東と京都を行き来するのに重要。

矢走の渡し近けれど、危険なルート。金飛脚――江戸時代、金銭を運んだ飛脚。

暮れ暮れて餅を木魂（こだま）の侘寝（わびね）哉　　芭蕉

貧しい私はその餅つきの音のこだまを聞きながら侘び寝している。

寒い夜の　のっぽ　キリストかもしれぬ　　宇多喜代子

ジングルベルが鳴り響く街角でふっと通り過ぎた男がなんだか気になる。

新巻は　家長の役と　おろしおり　　岩田　美蜻

新巻の　結び目しまる　塩滲みて　　安養寺美人

水洟（みづばな）や　鼻の先だけ　暮れ残る　　芥川龍之介

この句を書き残して自殺

ああままよ　年が暮れよと　暮れまいと　　一　茶

あのばあさん　病院へ来ぬ　師走かな　　村杉　踏青

ともかくも　あなたまかせの　年の暮れ　　一　茶

年暮(としく)れぬ　笠(かさ)着て　草鞋(わらじ)はきながら　　芭　蕉

十二月二十五日、野ざらし紀行の行脚から、故郷の伊賀上野に帰ったときの句。

ここに草鞋を解き、かしこに杖を捨てて、旅寝ながらに年の暮れければ。

旅人の笠着て馬に乗りながら口を引かれて西へこそ行け

藤原定家幼少の歌

を踏まえて、「馬」を「草履」に転化した。

この句を踏まえて

芭蕉去りて　そののちいまだ年暮れず　　蕪村

芭蕉が切り開いた俳諧の道を究めることもできず、新しい俳諧の道を見出すこともできない。

自らを振り返りながら、あらためて芭蕉の偉大さを讃えている。

ゆく年や　風にあらがふ　日のひかり　　久保田万太郎

今日のこと　年そこそこにして　年忘れ　　蕪村

魚鳥（うおとり）の　心は知らず　年忘れ　　芭蕉

魚は水に飽かず。魚に非ざればその心を知らず。
鳥は林を願ふ。鳥に非ざればその心を知らず。
閑居の気味もまた同じ。（方丈記）を踏まえている。

それぞれに　秘伝のありて　晦日そば　　中村八重子

大晦日、年の宿、年越しそば、

年の湯に　浮きて沈みて　ひとりかな　　橋本くるみ

年越しは　般若波羅蜜多か　紅白か　山田健二郎

除夜　零時過ぎて　こころ華やぐも　山口　誓子

大年（おおとし）や　わが死にどころの　鐘も鳴る　一　茶

除夜の鐘　わが身の奈落より　聞こゆ　山口　誓子

裏山より　人湧いて出る　除夜の鐘　坂本　光世

年の火の　吹雪をなせる　火の粉かな　辻　桃子

年守（も）る夜　老（ろう）は尊く見られたり　蕪　村

今　思へば　皆　遠火事のごとくなり　能村登四郎

旅(たび)に病(や)んで　夢は　枯野をかけ廻(めぐ)る

芭　蕉

季　－四季を愉しむ－

2008年3月3日　初版第1刷発行

著者 —— 山田健二郎
奈良市紀寺町856－18（〒630-8306）

発行 —— 株式会社 かんぽうサービス

発売 —— 株式会社 かんぽう
大阪市西区江戸堀1丁目2番14号(〒550-0002)
電話……(06)6443-2171 ／ FAX……(06)6443-2175

印刷／製本……モリモト印刷株式会社

©2008 Kenjiro Yamada, Printed in Japan